

**文部科学省 「学校卒業後における障害者の学びの
支援に関する実践研究事業」**

**当事者に学ぶ視覚・聴覚障害者の生涯学
習を促進する地域連携プログラム～セル
フアドボカシーからクロスアドボカシーへ**

2021 年度

報 告 書

日本社会事業大学

も く じ

第一部 2022年度の事業

日比野先生・ゆんみ先生の盲導犬・聴導犬セミナー・・・・・・・・・・	1
清瀬市視覚障害の会「あかり」と聴覚障害者・・・・・・・・・・	21
視覚障害者を中心とする聴覚障害者支援者のためのPCタイカー研修会・・	30
聴覚障害者を中心とする盲・盲ろう者のためのコミック言語化作戦・・	51
菊地美由紀先生と考えるコロナ禍の視覚障害者&聴覚障害者・・・・・・・・	59
盲のスーダン人モハメド・オマル・アブディン先生のセミナー・・・・・・・・	80
広瀬浩二郎先生の「触文化」セミナー・・・・・・・・・・	92
地域連携クロスアドボカシー事業「全盲&ろう」at 清瀬第五中学校・・	97

第二部 コンファレンス

当事者に学ぶクロスアドボカシーコンファレンス・・・・・・・・・・	125
----------------------------------	-----

第三部 連携協議会

連携協議会議事録・・・・・・・・・・	150
--------------------	-----

その他バリアフリー教材・・・・・・・・・・	170
-----------------------	-----

はじめに

文部科学省『学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業』の助成を受けた本事業「当事者に学ぶ視覚・聴覚障害者の生涯学習を促進する地域連携プログラム」は「セルフアドボカシーからクロスアドボカシー」というサブタイトルがついています。

セルフアドボカシーはもう10年以上前から聞かれていたことばで、このプログラムの前身は「当事者に学ぶ視覚・聴覚障害者のセルフアドボカシープログラム」(2018-2020)でした。今年度から「クロスアドボカシー」と名付けて視覚障害者と聴覚障害者の学びあいを目指しています。今年度は聴覚障害者に盲導犬を知っていただき、視覚障害者には聴導犬について知っていただくというような企画を実施し、大変好評をいただきました。視覚障害者と聴覚障害者は通訳さえいけば、分かり合えるし、相乗効果でもっと素晴らしいアイデアが出てくると確信しました。またお互いの支援者として活動する当事者の方々も出てきました。

一方、地域の中で視覚障害者と聴覚障害者の連帯が非常に弱いこと、視覚障害者と聴覚障害者の連帯となると全くと言ってよいほどないこともわかりました。その人たちをほんの少しつなぐことができたことは初年度の成果でした。

コンファレンスを経て、クロスアドボカシーの意義がより明確になりました。障害をもつ人たちが自分たちの障害についてアドボカシー活動をすることはあたりまえになってきましたが、障害者共通のテーマを提起し、お互いに共感することはまだ行われておらず、これが実現すれば学び直しの点でも、アイデンティティの確立の点でも、また支援の質向上の点でも大きく前進すると思われまます。

コンファレンスでは、セルフアドボカシーに対する意識は視覚障害者と聴覚障害者でかなり違うことも明らかになりました。デフフッドやデフゲインということばに現れているように、自らのアイデンティティと仲間の連帯を重視する「ろう文化」は障害学を牽引してきました。視覚障害者の中にもそのような考えをもつリーダー的存在が少しずつ目立つようになってきました。両者の協力はそれぞれのアドボカシーを推進すると確信しました。

障害を自らの特性として肯定的にとらえ、そのことを主張できる社会を目指して、今後も当事者の皆さんと共に事業を進めていきたいと考えています。

2022年3月5日

日本社会事業大学社会福祉学部
教授 齊藤くるみ

第一部

2022 年度の事業

日比野先生・ゆんみ先生の 盲導犬&聴導犬セミナー



ゆんみ先生の著



連携協議会の日比野委員著

日比野先生の盲導犬についてのお話（6月4日）

日比野：

まず現在盲導犬はどのぐらいいると思うか？

Iさん：

900頭

日比野：

ほぼびったり 860 頭ぐらい。最高に多かったとき、2009 年頃 1070 頭。1000 頭ぐらいが続くだろうなと思っていた。ところが 860 頭まで落ちた理由は、盲導犬を使っている方の高齢化が一番大きい。平均で 60 歳ぐらい。そういう方が代替えを持つが、自分が先に死んだらかわいそうだと行って代替えを持たない方が多いと聞いている。新しいユーザーはどのぐらい増えているのか。100～150 頭平均 120 程度。去年はコロナもあったようだが 103 頭。そのうちの 75% ぐらいは持ち替えの人。盲導犬の協会は持ち替えを優先する。

新しい人は 20～30 人しか持てない。盲導犬の訓練者、協会は、盲導犬を持ちたいと思っ
てから 2～3 年かかりますよ、犬が足りないの、と言うという噂もあるが、実はちょうど
いいぐらい。少しだけ犬が足りないぐらい。

持つまでの期間はあるので、「はい、来月から訓練を」ということにはならない。確かに持
ちたいと考えたら早めに言う必要はある。

盲導犬の協会・訓練所は 11 団体、14 施設ある。公益財団法人北海道盲導犬協会、公益
財団法人東日本盲導犬協会（宇都宮）、公益財団法人アイメイト協会（最も古い）、塩屋賢一
さんがチャンピーを出したところ。この本はサピエ等にある。日本盲導犬協会（訓練所 4 つ。
仙台、神奈川、富士、島根にある）、社会福祉法人中部盲導犬協会、岐阜寄りの場所に移っ
た。以前、会長と仲が良かった。名古屋大の名誉教授で考え方が大好きだった。サーブとい
う犬が自動車にはねられて、主人をかばって足をなくした。その銅像が名古屋駅前にある。
最近盲老人ホームを建てた。入居を受け付けてる最中。おもしろいのは盲導犬もペットも大
歓迎という施設。特別養護老人ホームも併設。温泉付き。

公益財団法人関西盲導犬協会は、京都府亀岡にある。社会福祉法人日本ライトハウスは、
大阪市にあるが訓練所のみ和歌山白浜にあった。今は大阪府千早赤阪村と言う大阪で唯一
の村にある。鶴瓶の家族に乾杯に出ていた。社会福祉法人兵庫盲導犬協会は、神戸市。公益
財団法人九州盲導犬協会が福岡にある。その他補助犬協会が神奈川にある。ここは盲導犬の
訓練士が介助犬、盲導犬、聴導犬、三種類の犬を育成。この三種類を補助犬という。身体障
害者補助犬法というのがある。飲食店・宿泊所に受け入れよという法律。

以上 11 団体が 100～130 頭ぐらい、多くても 150 頭を育成。育成ともいうが「作出」と
いう。

一方、日本で視覚障害者は 31 万 2 千人いる。これが公的な数字とされている。だいたい

1%、3千名が盲導犬を持ち得ると考えればよい。

1960年代にニューヨークのコロンビア大学が調査をしたことがある。そこではほぼ1%が持ち得ると言った。日本では昭和の最後ぐらいに、ダイレクトメールでボールペンと財布のセット、えんぴつなど送りつけて、振り込み用紙を同封し、盲導犬育成のための寄付を募る人が現れた。あくどいやり方で捕まえられなかった。

クレームをつけても「寄付をしている」、と言って認めなかった。はっきりしなかった。しかし団体はもらっていないと思われる。法律的に闘えず、マスコミで盲導犬協会は募っていない、送りつけたりしていない、と発信。ダイレクトメールが来ても連絡をとってほしいと。一応下火になった。

今行われている寄付活動は本物と思われる。皆さんの中で寄附を考える人は直接連絡を取り合ってほしい。寄附証明書を出すはず。税金控除。

もうひとつ新しい茨城盲導犬協会ができた。これで計11協会。

どうやって盲導犬は作られるのか。

ほとんどがラブラドルリトリバー、ゴールデンリトリバー、二つを掛け合わせたF1という種類の三つ。最初はジャーマンシェパードだった。各国で軍用犬から、盲導犬に。

三種から選んで、繁殖用に残す。雄犬を3頭、雌犬を7頭ぐらい。掛け合わせるころから始まる。繁殖計画。素質がよいと考えられる犬。世界的に繁殖計画。

生まれて2か月ぐらい訓練所で育てられる。その後、各家庭（バピーウォーカー）に預ける。家族3～4人か5人程度。毎日散歩、トイレはおうちの庭で、したら褒めて入れてあげる。散歩するときは右側、あるいは左側の端。十字路で、一旦停止、というように歩く練習。

自然に心得てもらおう。たたいたり怒ったりしない。愛情をもって一緒に生活。室内で飼う。一歳になる頃 訓練所に引き上げられる。適性検査をして、攻撃的なら×、あまりに引っ込み思案でも×、犬がきたらとびかかる×・・・20項目。満たさなかった犬は、家庭にあげてしまう。「差し上げますが、応援してくれますか」と、数万円もらう程度。本当は何十万円だから、売り飛ばさないようしょっちゅう連絡する。

犬たちの訓練は大きく分けて三つ。一緒に歩く人をものにぶつけない、交差点、段差で止まる、とまらなかつたらNO、できたらgoodと繰り返す。歩いている歩道がふさがれていたら、一旦車道に降りる、またもどる、(意外とむずかしい)。よけて、もどる。

最後に「利口な不服従」。一番難しい。交差点で「青だ」と命令されても。車が右折・左折してきたら、犬が止まる。何度も練習する。訓練士が車を運転する役と、主人の役をやる。それ以外はいつも主人の命令に服従。危険なときだけ回避。これが盲導犬らしいところ。

犬たちは2歳前に、避妊手術をする。主人になる方を待つ。これを候補犬という。それぞれ性格が違う。目の不自由な人と指導員が歩いていて、この人にはこの犬がいいかなとペアリングする。

28日間か1か月間、共同訓練または合併訓練というものが開始される。主人と犬の訓練。朝起きたらブラッシング、餌をあげる、日比野も10年盲導犬を使った。夜9時を食事時間と決めた。一日一回、生肉200g、ドッグフード200グラム、スキムミルク。大きめのボールいっぱい。「私は盲導犬イエラ」という本に書いた。20~30年前。

通勤に必要。9年ぐらい満員電車で通った。JR、施設、飛行機に連れまわして啓発した。犬を認めない人達と口論をしなければならなかった。

共同訓練では手入れ、えさ、トイレの訓練、、、ベアのリズムをつくる。手入れをきちんとすれば臭くない。人間側で管理できないとだめ。Twitterで、虐待だと言われたりするが、視覚障害者もルールを守り愛情を持ってできるだけ長い期間使えるよう努力をすること。寿命としては長い、一緒に歩く寿命は8年から10年。

別れて次の犬へ、生きている間に持ち替えたほうがいい。その犬が死んでからでいいという人もいるが心の痛手になる。

では、盲導犬のどういうところがいいか、悪いか。

杖より安全性は高い。犬といっしょならまずぶつからない。ジョギングもできる。またなんともいえない犬との関係ができる。人間よりも、お利口だね、というふうになる。家族のヒーローになる。赤ちゃんがいるとミルクのにおいがすきなので、赤ちゃんに乗っかってしまったりする。置き場所を考えてあげないと。

デメリットは、どこか行くとき餌など荷物が多くなる。ホテルに泊まるには大きなふろしきをいつも持って行った。ここがベッド。「ステイ」と。その横で人間は寝る。途中でトイレに行くにつれてきてしまう等。

まだ市民権がなかったので、一本でも毛がぬけると文句を言われたりした。(ガムテープを持っていて証拠隠滅したり。)
「あんたは、毛はぬけないのか」と喧嘩したこともある。出張が多く荷物が倍になった。

メーリスでもあったが、病院とかで手術室はだめとか、「自分がいないと不安になるので」ということもある。

飲みに行くとき、遅くなるとこたえるから、一旦家に帰って杖を持って飲みに行ったりしていた。帰ったら、犬がとびかかって来る、どこ行ってたの???

面倒ならやめといたほうがいい。「全く自分は歩けないけど盲導犬もてますか?」という質問があるが、その場合、何時間でも白杖の訓練をすべき。犬はどこに行くかわからない。すべて主人の命令で動く。

人間はずぼらになる。反対まわろう、なんて思っても、犬に無理にひっぱられるとどこを歩いているかわからなくなる。自分がどこにいてどこへむかっているのか意識することが重要。自分で歩いているという意識を持つためにもまず白杖の訓練を。どこの訓練所でも白杖の訓練をやっている。盲導犬の訓練を受けに来たんだ、白杖の訓練じゃない、と言ってや

らない人もいるけど、絶対必要だと思う。

費用は、盲導犬本体は都道府県年間1頭分、2頭分くれる自治体もあり、寄付によるところもある。自動車販売連合会で募金を集めている。したがって、犬自身のお金はかからない。餌代は自分、健康管理費も自分。自治体の中では出してくれることもある。個人的にはあまり賛成しない。所得によるならいいが。自分の犬なんだから。狂犬病、ジステンバー、肝炎の予防注射も必要。何かがあれば獣医さんにつれていくとか。それは必要なので協会に格安の獣医を聞いておく。

どこの訓練所がいいのかという質問も多い。

近いところがいいと思う。北海道の人が九州に行って訓練を受けたが、冬歩かなくなったとか。雪にびっくりして。慣れた環境で。また訓練所はアフターケアもしてくれる、巡回もある。

海外旅行はだめな国、いいという国いろいろ。

検疫で一週間とりあげられたりするところもある。オーストラリアなどはOK。手続きが大変なので、近いところに訓練所があると預かってもらえる。

3000頭になるだろうと思われた（1998年ごろ日本財団、曾野綾子に頼まれて調査）。訓練所だけでなく全体的調査をして、想像していた通り、3000頭活躍できるようになるということになった。コロンビア大学の数字とあっていた

しかし、和式と洋式のちがいが大きい。外を歩いてそのまま入ることができない。家族・親類との説明面倒。日本は1000~1500ぐらいかも。今860頭で、倍ぐらいにはなるだろう。

以下フリートーク

Iさん：

何で指示語は英語なのか。日本語だとユーザーの指示とまじるから？でもアメリカでは？

日比野：

1がすすめ、2が止まれ、3が左、4が右とか言うと、こっちがおぼえられないからではないか、などと言う話もあったが、英語だと音調で理解するらしい。日本語のほうが激しい。英語の音調は単純。ドイツでも英語。北海道は日本語でやっていた。オーストラリア、ニュージーランド系統の日本ライトハウスはトイレしなさいを「スペンドペニー」という。他の人にわからない。ワンツーワンツーも多い。北海道盲導犬協会は日本語で「べんしろ」とい

う。わかりやすいからいいというのが、露骨すぎるか？

斉藤先生どうでしょうか。

斉藤：

単なる慣習だと思う。聴導犬は音でなくても指示を理解する。訓練次第。

日比野：

英語が一番ポピュラーなのかな。

斉藤：

一般の話と混じらないほうがいいと思うが、犬は耳がいいから問題ないと思う。

日比野：

鼻と耳はすごくいい。聴力は人間の100倍、嗅覚は1万倍、といわれる。象はもっとすごいらしい。今中国で象が集団で北上しているが。

斉藤：

象は足の裏でも通信できる。

日比野：

そうそう。そのうち盲導象なんてできるかも。

斉藤

邪魔でしょう。置く場所がない。

日比野：

盲導馬をやろうというのがあった。ポニーを使って。北海道なんかだと結構いる。ちゃんとした盲導馬ではないがスポーツ馬として。ちゃんと帰ってくる。

斉藤：

馬は頭いい。

日比野：

もっといいのはチンパンジー。しかしチンパンジーは絶対だめ。悪さをする。

斉藤：

介助サルにするために歯を抜いて、動物愛護の点ですごく怒られたという話がある。

日比野：

虐待だ！！という声。盲導犬についても。一般的にそう思われたということがあってユーザーがかわいそうだった。

斉藤：

昔、医療系の先生が、盲導犬の訓練は犬の好きな人にはとても見せられないんだよといわれたことがある。

日比野：

正直な話、ある訓練所はスパルタ的に訓練していたところはあった。叩いたり。動物愛護協会から何度も怒られた。ほとんどの訓練所ではそれはしない。叩いて育てると仕方なくやる、ほめられると喜んでやる。首輪チェーンから革でひっぱる、ゆるめてピン、とやると気づく。やり方をユーザーたちに教えるところもある。

斉藤：

有望な候補は人工授精？

日比野：

それは本当。盲導犬自体ではなく、その系統があって、どれとどれをかけあわせた子？というのやる。いい犬の精子を冷凍保存も。ニュージーランド、オーストラリアが人工授精先進国で確かにやっている。日本でも輸入しているところもある。日本でもやっている。うちはイギリスだとかアメリカとか、、、。最近はアジアのブリーディングネットワークがある。ガイドドッグになるための交換をし合う。日本がやればアジアネットワーク、加わっているのは韓国・台湾ぐらい。

斉藤：

人間の勝手だと、学生が怒っていた。

日比野：

それはわかる。誤解は多い。

斉藤：

馬だって走らせるために。

日比野：

大谷翔平の血統だってすごい。親があったからあそこまでというのはある。

斉藤：

人間でも平気でやっている。SNSで、精子のやりとりでもやる。医学部卒、2万円とか3万円と言って、嘘だったと言って訴訟がおきている。人間もやっているのに、盲導犬で怒ってはいけないかも。

日比野：

残念なのは日本のネットワークを考えると、11団体でなくても、ひとつにしたほうがいいかな、、と思う。繁殖専門、飼育専門というのも合理的ではないかと思うが。それぞれ歴史があってそうはいかない。カナダは合理的。盲導犬の訓練所がなかったころ（今は世界の中心とも言えるが）、欲しい人がいたらイギリスに行かせて、訓練した。作るより安いと。カナダ盲人援護協会の基本的な考え方だった。追いつかなくて結局中で訓練するようになった。

Iさんはどこで訓練を受けた？

Iさん：

あさひ、島根県に日本盲導犬協会。

日比野：

結局その犬をもちたいということになる。地元が一番便利。

Iさん：

ダラスに行く時検疫等あり、預けたけれど、関西・九州だったら預かってもらうのは大変だったと思う。連れて行くのも迎えに行くのも。北海道で雪の訓練をするけど、自分のところではそれほど必要ないと思う。

自分のはゴールデンで、脱毛が多い。もうそろそろ終わりかけている。

白杖歩行の話はよかった。盲導犬の人は白杖使わない。訓練を受けたとき損害保険に入ってくれと言われた。白杖でホームで足をひっかけてしまったり、自転車にまきこんでしまったりするので、25年前に保険に入れと言われた。盲導犬になっても維持している。視覚障害の会のたびに、呼びかけている。加害者になる危険も高い。車の運転の自賠責保険と同じ。

Sさん：

損害賠償の社名を教えてください。

I さん：
損保ジャパン。

S さん：
保険会社にきいても、なかなかない。

I さん：
メーリングリストに連絡先を上げます。PDF をつくってもらった。校正に出してテキスト化してもらった。

S さん：
URL だけください。

I さん：
表がばらけるので校正に出してもらった。

S さん：
白杖歩行中に自転車を倒したことがある。お買い物をしていて人が卵が入っていてわれてしまった。駅でお年寄りをつまづかせそうになったり。今日はわかってよかったです。

I さん：
保険の掛け金は 17000 円ぐらい。加害者 1 億円。自分のはのろいので時間がかかるかもしれないけど送るので。

S さん：
とんでもございません。
日比野先生が 10 年盲導犬を使っていたとのことだが、最初に盲導犬を使おうと思ったのと、やめようと思ったきっかけは？

日比野：
杖で十分と思っていたが、昭和 53 年か 55 年頃、日本ライトハウスのリハセンターの前身の所長代理をやっていたとき、ライオンズクラブが盲導犬を一頭分寄付するよと言った。県内の人に使ってほしい、と言っていた。ノミネートされて決定した方が急病になってお断りしたら、所長代理がこの住民だろうと言われたけれど、所長が、「杖がいいと言っている」と言ってくれた。しかし盲導犬訓練やってるんだから見本もあるべきだと言われた。一度持ってくれと言われた。

それで、持つことにした。近鉄電車で満員電車3回乗り換えして通勤。これができたら、モデルになると思い、訓練を受けた。通勤に使えるかどうか。

持ったら犬が好きなので、半年苦労したけど。満員電車で車掌が飛んできて止められたり。「なんで今言うんだ。昨日までよかったのに」などと車掌に嘘を言ったり。一か月もしないうちに周りが考えてくれて、かわいいかわいいと高校生が喜んで可愛がってくれるようになった。上が混んでいても下のほうはすいている。

ホームからおちる不安はなくなる。

日本では盲導犬を連れてて落ちた人もいる。湖に落ちた例もある。たぶん点字ブロックを使っていて右側を歩いているのか左側を歩いているのかわからなくなったんだと思う。錯覚することがある。どっちがホーム側かをまちがったのだろう。犬側がホームだったんだろうなと思う。湖に落ちた例は犬がこわがって、犬がいかないのでなぜ行かないのと勇み足をしてしまった。盲導犬の前を歩かない。これは鉄則。主人を危険にあわせることはない。完全に信用できるかどうか。白杖から盲導犬にかわるとき自信があるので、犬より前に行ってしまうということがある。犬を信頼して救われることが多い。

止めたきっかけは特にない。犬を育てた訓練士がこれ使ってと言ったけれど、要らないよと。最初の犬がかわいかったから。死ぬ前に分かれたほうがいいよと言われるけれど、本当かな思った。耐えにくいかなと思った。自分で体験したかった。所長になっていたが最後まで自分自身で体験したいので、交換時期とかあっても、最後まで持った。

アメリカに往復し始めたとき、3回目か4回目の渡米のとき、14歳8か月で弱っていた。調子悪いので獣医に連れて行ったらもう無理だといわれ、呼べば応えようとするからやめてやってくれと言われた。死ぬまでそばにいようと思ったが、飛行機に乗らなければならなくなって、急いで行ったら、ちょうど飛び立った時間に亡くなった。つぎのを持ちにくい。早いうちに交換というのは自分もそう思う。

Iさんは何頭目？

I：

一頭目。小学生や周りの人に、10歳が定年だよという。シニア犬になったらしつけもできているので、家庭に入って寿命まで持ってもらえる、喜ばれるような犬にする。犬も白内障にもなる。目の悪い犬が身の悪い人を世話することはできない。

日比野：

二頭目はどうするのか。

石田：

一応希望します。今の犬は興味津々の犬で向こう側の舗道を歩いて犬に静かになったが最

初は興味津々で匂いを嗅ぎに行って道に迷った。最近はやらなくなったが。そろそろ引退させるかも。すごくなっている。でもあとの役割の人をお願いします。パピーウォーカーさんも訓練に入るのが悲しいと思う。1歳までのお役目だから。ぼくらは2～10歳の役目。

日比野：

盲導犬ロボットの研究がさかんになっている。有名な会社総動員で（5社）キャリーケースぐらいのもので、がらがら押していくと、コントロールして、2m先に段差あり、とお知らせする。最初にインプットすると案内してくれる。夢ではないと言われている。2～3年にはデモ機が出回るのでないか。科学未来館（宇宙飛行士の野口さんが館長だった）で、視覚障害者の女性が、IBMのフェロー浅川さんが4月に館長になり、企業とタイアップして是非作りたいと表明していた。それはいいかもしれないけど犬と人間の関係がなんとも言えない、いいんだという人もいる。でもどんどん出てくると思う。

Iさん：

スーパーマーケットの案内とか。空港とか。わたしが住んでいるところは歩道もきっちりしていないし、郊外なので。山にのぼるのは無理かな。竹藪があったり。使う場所による。盲導犬を持っていいと思うのは意志を持っているところ。

斉藤：

犬と人間が心が通じるときは、似たような脳の状態になっていると言う研究がある。犬には共感性がある。ロボットではできない。文科省の次の事業でクロスアドボカシーというのをやっている。聴導犬とクロスさせるのは面白いのでは。実際視覚障害の話をする。聴覚障害の学生のほうが、一般の学生より興味をもつし、理解がよい。たとえば聴導犬のはなしをして交流したらどうだろう。

S：

大賛成です。

斉藤：

ロボットがいいと言う人をいいますか？

S：

相互作用についてはサイトだったか本だったか読んだことがある、ヒーリングの例を見たことがある。小児病棟の。

斉藤：

NHKで。何度も再放送を見た。

S:

検証されている。人間のトレーナーが足りない。

斉藤

カナダに渡って訓練したとテレビで言っていた。

S:

昔はあったのがカナダなどは盲学校がなくなってもやっていけるレベルになったとのこと。一般学校の中でやっていけるようなシステムができたと聞いている。イギリスに行ったほうが安いというのにはバックグラウンドがある。

日比野:

カナダは独得、日本と似たところもある。アメリカよりカナダのほうがいいかなと思う。

斉藤:

言語の点でも、アメリカ人からはイギリス人と思われて、イギリス人からはアメリカ人と思われる。カナダ人ははっきりものを言うのでびっくりすることがある。

日比野:

日本に似ているところもある。トロントは零下20度。

斉藤:

アメリカに行っていた人も言っていたけど、インテグレーションで、年に1~2か月家族と一緒に合宿して訓練を受けると聞いた。

S:

アメリカ国内でもトレーニングで学びやすい環境を選べるようになっている。

日比野:

盲学校も残っていて、ヘレンケラーのパーキンスなど。どっちがいいかなというのは好みがあると思う。

斉藤:

インテグレーションは権利と言う方向だが、ろう学校は廃止して大反乱がおきることがあ

る。コミュニティーがこわれてしまうので。ろう者同士はどころう学校？とまず聞いて、3人知っている人を上げると必ず共通の知人がいると言われるほど。聾学校をなくすのはとんでもない、というろう者たちがいる。

日比野：

元々一般の学校に入れなかったのが問題で、選べるなら問題ない。昔は法律違反みたいなことを言われたから。

斉藤：

そのほかにご発言は？森先生介護ロボットの研究をされているが。

森先生

日比野先生の講義を聞いて佐野時代をなつかしく思った。コミュニケーションロボットもあるけれど、人の動きを助ける、サポートするものと考えている。盲導犬に置き換わるかという疑問。介護ロボットも人がいなくてもいいということではなく、介護者がちょっと楽になるとか、利用者の自立が促進されるとか。ロボットありきではなく、上手に組み合わせている。共感、受容・傾聴が重要だ。

斉藤：

犬好きあつまってテンションあがった。犬は犬好きの人がわかる。

森：

犬がおなかみせてくれると嬉しい。

斉藤：

犬を好き人がわかるのがすごい。

では、続きはめーりすで。

ゆんみ先生の聴導犬についてのお話(7月30日)

ゆんみ：

最初は聴導犬なんて要らないと思っていた。アメリカで、ドウシテ必要なの？歩けるし、聞こえないだけで何でもできるのにとしたら、共に生きるんだよと言われた。

聞こえないことをサポートしてくれる。その代わり育てなければならぬ、飼わなければならぬ、対等の立場だと。悪くないなと思った。助けてもらうのは嫌だと思ったけれど、アメリカ人はパートナーと呼ぶ。人が助けてもらうというイメージがある。共に生きるというような考えを言われて、いいな、ほしいな、と思った。24時間一緒にいられたらいいなと思った。

聴導犬なら24時間いつでもどこでも連れて行ける。

日本ではリトリバー、アメリカでは種類を決めてトレーニングしてもらう。試験がある。

介助犬・聴導犬は種類は特に関係ない。何でも構わない。トイプードルでもOK。疑問だったのは犬を連れていたら、働いていると思ってもらえるのかな、ペットとしか思われぬのではないかということ。

日本は家がせまくて大きな犬を飼えない人が多いので小型犬が多い。盲導犬は大きい。聴導犬は大きくても小さくても問題ない。

聴導犬に必要な仕事は二つ。音を教える。一般的に必要な音。やかんがわいたら教えてくれる。料理のタイマーの音を教えてくれる。ファックス来たよ、とか。

命を守る音。車のクラクションを教えてくれる。災害の時警報機などを聞き分けられる。

もう一つの考え方、聴覚障害は社会的には見ていてわからないので、話しかけられたりして、無視したと怒られたりする。耳が聞こえないというとはわかってもらうのに、時間がかかる。電車の中で話しかけられても、わからない。電車が止まってもなぜなのかわからない。雰囲気がちがうな、、、とはわかるが。その時に何が起きているのですかと聞きたい、皆はアナウンスが聞こえている。誰かに聞かなければならないけど、誰かれなく訊くことができない。私は聞こえないので肩をたたく。聞こえる人にはその文化がないので、びっくりされる。予めメモを持って今何が起きているのですかと差し出す。聞こえないんですね、と筆談してくれる。わかるまでに時間がかかる。もし最初から聞こえないとわかっていれば対応がかわる。

「聴導犬」という服を着せているので、周りの人が理解してくれる。

「盲導犬」とまちがわれるが、時間をつぶそうと犬をなでていたら隣の人が肩をたたいた。聞こえる人から方をたたかれることがなかったののでいぶかしく思っていたら、「事故があったので10分館止まります」と書いてくれた。勇気が必要だったり時間がかかったり、誰に頼むのかあらかじめ心の準備が必要だったが、聴導犬がいると相手の方から情報を提供してくれる。

聴導犬は聞こえない人と聞こえる人の壁をこわしてくれる。バリアフリーの状態。正しい対応をしてくれる。メモを渡した方がいいのかな、と正しい対応ができる。

もし聴導犬がいなかったら、聞こえる人と間違われてしまう。髪型によっては補聴器も見えない。聞こえない人と聞こえる人の架け橋になるのが犬。存在自体が聞こえないことをわかってもらえる。

以上二つの役割。

アメリカで生活していたときのこと。日本を比べると、アメリカの場合は私が犬の育て方がわかっているかどうかの訓練から始める。日本の場合は犬に判断を任せる。

アメリカではパートナー。日本は訓練された犬に任せるところがある。その人が犬のことがわかってなくても。アメリカでは犬のことを知ることから学び始める。たとえば歩いていくとき人より先に犬が歩かない。並行で歩く。横並び。コミュニケーションがとれるかどうか学び始める。40時間以上犬のことを学ばないと、聴導犬の仕事はさせない。犬の方がわかっていて、人間が犬を学ぶ。コミュニケーションできるか学ぶ。リードの持ち方、音の訓練、タイミング。たとえば家の中で、訓練が終わって音にびっくりしたり噛んだりしないように落ち着いて生活できるか、ロボットのように。

犬は感情があるが、ただ普通の犬より落ち着いていることが必要。感情のコントロールができるように人が守ってあげる。突然花火など大きな音、そういうとき人が見てあげる。盲導犬はがまんしている部分が多いかも。ろう者は見えているので犬が怖がっていたり、がまんしているのを人間が守ってあげる。

犬の気持ちを和らげてあげる。パートナーの役割。フォローし合って。お互いに助け合いながらというのがアメリカの考え方。

日本に戻ると、イメージが違った。「がんばって」という雰囲気があった。アメリカは暖かめで犬が失敗しても応援してくれる雰囲気があった。見守ってくれる雰囲気があった。

日本ではミスがあったら認めない雰囲気があった。聴導犬は仕事が100%できなければだめと見られているような。失敗すると、聴導犬のくせに仕事できないのか、と。

安らぐことができなかつた。苦手なタイプの人近づくと感情がゆれうごく。そういうときはこの子苦手だろうなと感じたら顔を合わせないようにしたり、コントロールしてあげる、気を遣ってあげる。

アメリカではそこまで気を遣うことはなかつた。二人でひとつと見てくれる。自然体として見てくれる。日本では人と犬、別人格として見られる。失敗するとやっぱり犬だからね、と。犬は犬でしょと。神経をつかつた。アメリカからつれてきたとき、アメリカで4年生活していて、日本は6年。人生の半分ずつ。アメリカにいるときと表情がちがっていた。アメリカではのんびり穏やかだった。日本に来ると緊張していた。私も緊張していたので影響したかもしれない。

アメリカで4年、日本にもどってから、世界中つれ歩いた。韓国、イギリス、ハワイ。聴導犬にはパスポートがない。入国の申請が国によって違う。イギリス、ハワイは簡単には入れない。台湾も。イギリスは6か月前に申請をしなければならなかつた。狂犬病がない国なので6か月。アメリカ、韓国から出てきたら、6か月留め置かれる。イギリスに行く場合6か月前から日本にいななければならない。アメリカは狂犬病がある国なので簡単に入国できる。イギリスは元々犬をかわいがる国として有名。エリザベス女王はコーギー2〜3匹抱えている。王宮の中でも。犬がいるのが当然。世界補助犬会議というのがあって、盲導犬・介助犬・聴導犬の交流。イギリスは介助犬が増えない、誤解が多い。

一般に介助犬は見たらわかるので増えやすい。イギリスは逆に聴導犬のほうが多い。介助犬は少ない。どうしてか聞いたら、犬をかわいがるので介助犬の仕事のイメージ、重いものを引っ張ったり、移動するとき体を支える。それはイギリスでは虐待だと思われる。どうしても可哀そうだと見える。聴導犬はそうでもないので、と言われた。

国によって違うなと思った。盲導犬についても日本ではラブラドル、それ以外の犬は見ないどうしてですか、と聞いたら日本社会が人目を気にする、優しい顔をしていて、失敗がなく、殴られても怒らない犬。海外では社会というよりパートナーがどう考えるかに重きを置く。社会ではなく当事者のため。ドーベルマンの盲導犬がいるので、びっくりした。海外では普通だよと。そこまで大きくはないが背は高くない、彼はドーベルマンが良かった。歩くスピードも早すぎる。でも犬と強い信頼関係がある。普通のスピードで息がぴったりで。

周りからの見方と本人の見方。

聴導犬の力というのは犬の判断力。盲導犬や介助犬の場合、コマンドを言う、それに従って動く。危ないことがあったら自主的に動くが、聴導犬は聞こえない人が指示することはない。

犬が判断する力を持っていなければならない。一緒に生活していて何でも吠えるわけではない。24時間どのぐらいの音があるか考えてみてほしい、どれだけの数があるか。それを全部教えてくれるわけではない。ドアのベルの音、やかんの音、キッチンタイマーの音。お風呂が沸きました。赤ちゃんの声。最低限の音。8種類ぐらいを教える。本当に必要な音に絞って教える。寝ている間も24時間働いている。ドアホーンがなればすぐ起きて知らせる。災害が起きた時も。休む時間がほぼない。本当に必要かどうかを犬が判断する。

見た目よりも神経がこまやかで大変な仕事である。

コメント

日比野（盲）：

良いお話で。お二人の通訳の方、よくわかる通訳でびっくりした。

私もアメリカで、犬の人間の関係においてどうして日本とアメリカが違うのかと思った。日本の場合、農耕民族だから。

アメリカではまさにパートナー、羊飼いのように、日本のような民族とは違うんだろう。

アメリカで盲導犬、聴導犬、介助犬、そばにいさせてもらった。犬との生活を楽しんで知る。

あれ、こんな遊んでいいの？と、日本の訓練士が思うだろうなど。

日本では人前で芸みたいなのをさせたら怒られる。

アメリカでは芸をさせて喜んでいた。

盲導犬・介助犬は障害者のため、一緒に生きる、パートナーと思った。

質問、聴導犬ですよ、ということを示すのは。視覚障害者は白杖があって、目の見えない人がいますよ、というシンボルという役割。文字を着せているというのは、ほとんどか。規則があるのか。

二つ目は補助犬法がある。ずいぶん前から。改正される中でもそういったものを使って交通機関等利用するのに拒否事例が出て来る。補助犬法には努力義務、罰則がない。罰則は個人的に好きではないが、日本の場合、是正されない。レストランに入ろうとすると、断られたら、レストランに罰金を科すべきだと委員会で私は言ったが1対9になって、通らなかった。ADA法は強制力がある。訴訟を起こしたりしているのは知っている。

日本だけではないよというけれど、聴導犬はそうか？日本で使われていて、しばしば起きているか。

ゆんみ：

イギリスの場合、色付きのオレンジのケープを着る。黄色いハーネスをつけて、リードもオレンジで統一。アメリカではすぐわかる。周りの世界に浸透している。日本の場合は特に決

められていない。わかるように文字の入っているケーブをつける。どこかに文字が入って有ればいい。小さなケーブをつけると字が小さいので色を決めた方がいいと思う。オレンジに統一すればすぐわかる。

アメリカでは障害者は街の中にふつうにいる。小さなハンバーガーショップがある。ダウン症の人が働いていたり、日本では、特別な施設に。アメリカではダウン症だからどうということもなく働いている。

日本では「すみません」というような感じになる。まず人として見ているか、、、もし分けて見ているとしたら。

アメリカは権利意識が強い。日本は意識が弱い。権利の主張が強い。パートナーとして選ぶ。ドーベルマンを自分で決める。社会が決めるのではない。日本は説明しても通じない。当事者ではなく研究者の話信じる。当事者が博士を取って直していく？ さすがにそこまでは大変。

言い訳ばかり。他のお客様が迷惑などという。言い訳、不誠実。お客さんに聞いてみたい。

斉藤：

日比野先生の本に同じことが書いてある。他のお客様のご迷惑になる、と日比野先生の盲導犬が断られたとのこと。

日比野：

「迷惑な方いますか」とレストランで聞いてやったら、誰もいなくて、皆が入れてやればいいと言いだした。

ゆんみ：

2000年頃、日本でまだ聴導犬は3頭しかいなかった

日本は聴導犬が小さいというイメージがあり、自分の犬は「盲導犬」と誤解された。

友達と歩いていると、早く歩くと、「盲導犬？歩くの早いね。」と周りの人が言っているよ、と教えてくれた。

東京から大阪に移動するとき聴導犬と一緒にいきますと言ったら、チケットもらうまでに1時間かかった。昔の新幹線は分かれて、JR東日本からJR西日本になるので系列が違うので電話で西日本に確認をとる、、、。新幹線に介護用の部屋というのがあって普段は鍵がかかっている。その鍵の予約が必要と言われた。知らなかった。チケットを発行してもらって、乗り込めると思ったときに、「介助が必要ですか」と言われた。駅に向かってチケット番号

を確認したら、番号がない。つまり普通の座席ではなく特別の部屋に入れられた。

聞こえない方ですよ、と言って、鍵付きの部屋で、個室で特別な部屋。

広いので邪魔されることなく大阪まで行くことができたが。

大阪に着く少し前にわざわざ「お忘れ物ないように」と。

優先的に降りた時、大阪の駅員さんに入出口まで案内します。と言われた。

肩をたたく、「どうぞ」と。「いえいえ」見えないわけではないので、と。

ぴんとこなかったみたい。聞こえないことがわかっていなかった。

大阪で聞こえない人が来ると理解してくれてなかった。後ろの人たちが、降りるに降りられなくなっていた。「眼は見えています」と言っても理解できない。ずっと肩をお借りした。犬が私をおかしいじゃないかといわんばかりに見ている。通じないから仕方ないのよ、と合図。2～3分は盲人になったつもりで歩いた。

質問

ろう者の方々は、聴導犬を見て、どのような反応をしたのか。

ゆんみ：

20年以上前の話だが、私がなんでもひとりでやる性格だと知っているの、「なぜ聴導犬なんか。断られるだけで、大変でしょう？」と言われた。レストランで断られることもあるが、負けずに説明する、「ろう者がわざわざ大変なことしなくても」と言われる。

難聴や中途失聴の人は必要なのはわかるけど、先天性の人は要らないんじゃないの？と思われた。なぜ必要なのか、ということ、「要らない」「要る」で、。

入れないことがあって迷惑だと言われたり、必要だということを少ない友達に言ってみた。電車が止まったときすぐに情報を得ることができる。聞こえないということをアピールして認めてもらうほうがいいんじゃないの、と言ったらわかってくれる人が増えた。

可哀そうだから助けてあげたい、ではなくて、説明が必要だと思う。時間はかかる。

20年近く連れて歩いているので、わかってくれるようになった。

聴導犬は意外に増えない。なぜだと思うか。不便なのに慣れてしまっているのではないか。やってみたらわかるかもしれないけれど。聴導犬が死んで、2年なしだったけど、やかんが鳴るまでずっと注意していなければならない。ろう者は何かしながらやることができない。教えてくれるまで任せておける。荷物が来ても再配達、犬がいれば宅配を逃すことはない。ずっと玄関を凝視する必要はない。その間別のことができる。便利さ、気持ちの軽さ。犬がいない2年間は大変だった。今までどれだけ時間を無駄にしていたんだろうと思った。郵便の人が帰ってしまって、しょうがないや、と思う。権利を失っている。

参加者の意見

盲導犬 VS 聴導犬についてのテーマは今まで全く触れることのなかった内容であるため、調べてみようと思います。マジョリティーは、大学内で障害学生が盲導犬（または聴導犬）を連れていくことに忌避感を抱きそうですが、マジョリティーが数的優位を用いて一方的に排除するのではなく、なぜ障害学生が盲導犬（または聴導犬）を必要としているのか、その主張と権利をマジョリティーに理解させる必要があると考えます。しかし通常、障害者と接する機会がない人間にとっては、障害学生の主張と権利、そして社会モデルの考え方を理解できず、その場は聞くのみで現状を変えることができない可能性があります。

あらかじめ袖山先生のことを予習しておけばよかったなあと反省しています。そうしておけば、当日もっと楽しめたかなあと思います。ところで、当日、皆様方がどのように連携して先生の話を通訳されていたのかが気になっています。また、聴覚に障害のある方がどのようにして聞いてらっしゃったのかも気になっています。この辺の話も、いつかお聞かせいただける機会を作っていただけると嬉しいです。

自分の名前が呼ばれたときに、犬からの「トントン」たしかにかわいいですね。「呼ばれたよ！」って言いながら、「トントン」しているのでしょうか。以前、イオンで聴導犬のデモンストレーションを観ました。目覚ましが鳴って、ユーザーさんを起こしに行く場面でしたが、ピョンピョン跳ねるように走っていくのがかわいかったです。

盲導犬と聴導犬の会話を聞いてみたいです（笑）…。

清瀬市視覚障害の会 「あかり」と聴覚障害者



「あかり」のHPより

見えない、見えづらさで悩んでいる方々へ。
私たちの活動が、一人一人の心を照し、道しるべとなることを願っています。
視覚障害者が人とつながり、より豊かな生活を送ることを目指しています。
毎月第4木曜日午後自由参加の茶話会をひらいています。

清瀬弱視の会「あかり」の皆さんとの懇談会

7月5日

清瀬市の視覚障害者の会「あかり」と今後の連携について話し合い。

「あかり」の代表長 N さん、Y さん、M さん

清瀬市ボランティア・市民活動センター星野さん

日本社会事業大学教授 齊藤くるみ

N さんは弱視で、日本社会事業大学の卒業生。

Y さんは日本社会事業大学「ハイホー」のクリスマスパーティに参加したことがある。

あかりの会には支援者「声のボランティア」の方たちも入っている。

パソコンより ipad、iphone の人が多い。IOS だと読み上げや拡大が搭載されている。

IT サロンもやっている。LINE 通話も使う。

音声ソフトの使い方を教えるのも、並んで覗き込んでやるので、コロナ禍では難しい。

何歳ぐらいに見えるとか、どっちが明るいかとか教えてくれるソフトがある。視覚障害としての使い方がある。

Y さんの視覚障害は小さい頃から病気で、だんだん進んだ。医者には治らないから来なくていいと言われる。

医者は治らなければその後は「知らない」「行政は最低限のことしかしない」。

埋もれている視覚障害者はたくさんいる。

ロービジョン眼科があって（杏林・東京医科大等）そこで情報が少しあった。たまたまあかりに出会わなかったら、何もわからなかった。

↓ ↓

アウトリーチの重要性

清瀬視覚障害者の会「あかり」と

聴覚障害者・支援者の勉強会

(12月1日)

1 自己紹介(自分の視覚障害と抱える問題)

①Nさん

一人で外出する時の困り事

②Mさん

人とのコミュニケーションの中での困り事

③Yさん

視力視野障害以外の困り事(眩しさ、色)

2 グループあかり活動紹介

①名前に込めた思い

②活動の3つの柱

3 私たちから見た障害福祉制度、医療制度の問題点

①医療制度の問題点(Y)

治せない病気は医療の対象外、手帳申請書類作成のみ

生活訓練、ロービジョンケア

障害者手帳取得後、行政のフォロー無し

30年間視覚障害福祉等のすべての情報から断絶

②障害福祉制度の問題点

●福祉情報の周知不足(N)

視覚障害者への情報提供不足

役所内での連携不足

●視覚障害者のネットワークの大切さの認識不足(M)

仲間とつながる体制作りは不可欠

プライバシー保護の壁

4 質疑応答

事前にいただいた質問事項について等

受講者から

視覚に頼っているなというのは日常生活でも感じていた。例えば、テレビを見ていても字幕がついている方が話の理解が早いなと思っていた。同音異義語や話が早いと何を言っているかわからない時もある。しかし、字幕があると内容が入るなと思っていた。そのようなことから視覚に頼っているという自覚はあった。今回の話を聞いて気付かされたのは色による判別のことだ。弱視と聞いたときに見える範囲が狭いことだと思っていたが、色の判別も難しいというのは新しい知識だった。お話の中では、色が赤や緑、青というのは判別が難しいということだった。最近はそのようなはっきりした色だけでなく、淡い色の組み合わせが多い気もしている。薄い色の背景に白地の文字というのも見えにくくなるのだろうと思った。色彩というのは強調したいことなどにも使う。私たちが特に大事にしたい部分にカラーマーカーを引くことはある。色彩への依存度というの知らずのうちに高くなっているのだなと思った。

ガイドヘルパーの話が上がったが、とても驚いた。果たして一か月 30 時間というのは十分な時間なのだろうか。30 時間という一日に一時間ということだろう。買い物するだけでも 1 時間というのは短いと思う。一時間で買い物を行うというのは近所のスーパーで急いで買い物して間に合うくらいだと思う。コロナウィルスが流行りだしてからは外で余暇を過ごす時間というのは減少していると思う。しかし、買い物というのは生活の一部になっているものだ。買い物を楽しみにしている人も多いと思う。私自身買い物が好きなのだが、その買い物が制限されているというのはストレスを感じるかもしれない。皆さんがガイドヘルパーをどのような時に利用するのか興味を持った。その中でどのような課題があるのかも知りたい。実習の中で知的障害の方のガイドヘルパー制度の説明を受けた。やはり、毎度買い物や余暇に家族の動向が必要というのは少し違う気がした。弱視の方も一人で行動できる場というのはもちろんあるのだろうが、ガイドヘルパーの制度がもっと充実してほしいというのはあるのだろうか。

グループあかりさんが行なっている小学校での視覚体験に興味を持った。わたしも中学校で視覚体験を経験したが、当事者の方の話ではなく担任の先生がすこし説明をしてそのあとペアで歩くというような体験で終わってしまった。当事者の方の話や、声をかけるときのポイントなどを聞くこと、そして視覚体験をすることで理解が深まると思った。今日のお話でもあったように、視覚体験を通じて視覚障害に限らず、外に出て色んな人と関わる中で目の前の人がある状況にあるのか、自分がどうすべきか想像力を高めることにつながると感じた。視覚体験が「こわかった」で終わってしまわないように、学校と当事者の方の連携も必要だと思った。

本日はお忙しい中ありがとうございました。

私は、N さん・M さん・Y さんの話を聞いて、弱視の方に限らず障害者の方への配慮は、

人それぞれであり、相手の意思を考えて、適切な距離感で関わるのが大切だと感じました。最初は、弱視だと気づかれていなくて、相手が気づくと、変に気遣いをされてしまい、辛い気持ちになってしまうので、相手に伝える時の判断が難しくなってしまうことが分かりました。そうならないためには、一般的な理解が広がること、行政との協働が必要になると考えました。また、他の視覚障害者とネットワークを構築して連携をとるためには、役所の働きかけがないといけません。しかし、役所はあまり協力してくれないという話を聞きました。忙しいからかもしれませんが、ないがしろにせず、しっかりコミュニケーションをとることは、最低限、実行する必要があると思いました。そして、障害者だからと言って、支援してあげるという考え方ではなく、対等な目線で、一緒に物事を行い楽しむことが大切だと感じました。

★(盲ろう) 11月24日事前資料「弱視の声」に書かれている事例について、私もほとんど経験している。この事例のほか、私自身の経験を述べたい。視野狭窄により段差や道端の看板にぶつかることが多く、転倒したり怪我をしたりすることがよくある。止まっている自転車などに気がつかず、ぶつかることも少なくない。また、階段昇降の際、降りる時のほうが強い恐怖感を覚える。12月2日の中途視覚障害者ゲストスピーカーの3人にも弱視当事者であり、とても親近感を持った。弱視当事者たちの辛い思いや大変さなどよく理解している。むしろ自分が伝えなかったことを話してくださった。私は急に視覚障害になったというのではなく、少々自覚しながらも見えづらいという気持ちを持ちながら生活してきたので、同じだなと思った。清瀬市には、大学入学のときから2年間ほど住んでいたが、あかりというグループの存在をもっと早く知っていたら、あかりのメンバーと交流できたかもしれない。ゲストスピーカーの3人に聞きたいことがたくさんあったが、質問できなかったことが残念。また講義してほしい。

白杖を持っている方にどのようなタイミングで声掛けをすればよいかは具体的に知りたいことだったので知ることができてよかった。たしかに駅のホームは場所的にも危険であるが、私たちが自分の事しか考えないで電車に間に合わせようと人をかき分けて走ったり、携帯ばかり見ていたり、とても怖い場所にしてしまっているのではないかと気付かされた。駅でも、横断歩道でも、行列に並んでいる時でも、自分のことだけ考えるのではなく、困っている人がいないかということに常にアンテナを張っていたい。

また、見えていないこと前提ではない話をされて、反応に困っていると、その話自体をなかったことにされてしまうことに寂しさを感じるというお話が印象的だった。悪気があったわけではないだろうが、結果的に視覚障害のある人を排除していることになっている。複数人いると、その場の空気が悪くなるかもと思い、遠慮してしまう、色を指定された時に「私はわからない」と咄嗟に言うことが難しいというようなお話もあって、「こうしてほしい」と言うことはとても労力のかかることだと想像できた。

全盲の方には全盲の、弱視の方には弱視ならでの困り事があるし、人それぞれその程度も異なることがわかった。同行援護の時間が、清瀬は30時間であるとのことであった。この短さは、人材不足によるものなのか、資金不足によるものなのか、はたまた必要性を認識していないからなのか。

治せない病気であるから医療の対象から外され、病院との縁が切れてしまったとのことのお話もあった。私の家族は、病院によってMSWが真剣に動いてくれるかに大きな差があるという体験をした。病院側はMSWの役割を重視し、MSW自身もその重要性を自覚して福祉に繋げる役目を果たさなければいけないと思った。

明かりの会の御三方のお話を聞き、弱視の方々が生活の中でどのような声かけを求めているのか、全盲と違う悩みや支援の違いなどがとてもわかりやすく理解することができました。特に印象的だったのは、中途障害ならでの同じ病気、障害で悩む人々との関わりを持つことが難しいという部分です。特に目が突然見えなくなると、外に出ることは難しく、メールや電話をすることも簡単ではないため、ほとんど孤立状態になると思います。人は歳を重ねるごとに新たな人付き合いをすることが難しくなることもあり、それだけでなくこれまでと違う慣れない状態での新たなスタートはそれよりも遥かに勇気や行動力が必要になると感じました。生活のあらゆる部分に不便があっても、弱視ということで支援の幅が広がっていない現実を目をむけこれまで当事者が声を上げていたところを、私たちも一緒に声をあげ支援の幅を広げていきたいと思いました。また、行政の対応などは、福祉を学び、これから社会に出る身としてしっかり受け止めて内部から変えていかなければならないと感じました。

★(ろう) 今回の講義では、あかりの会の方から話を聞かせて頂いた。聴覚障害と同じように、同じ視覚障害も見え方、生い立ち、環境が様々である。また感じ方も様々であった。今回の講義で、見え方や見えなくなった時の気持ちと状況を聞いたとき、自分だったらどうなるのか、どのような気持ちになるのか想像した。自分だったらどうするのかな等考えることも大切だと感じた。

本日の講義では、清瀬市視覚障害者グループあかりの方々に視覚障害、弱視について話を伺うことができた。今回の講義の中で一番印象に残っていることは、行政は支援を必要とする人側から言わないと教えてくれないという話だ。申請できる内容が分からず、申請できない。また、情報共有がなされていないため、異なる課へ引継ぎがなされていないというのも衝撃的だった。今回は、時間が無く質問することができなかったが、ガイドヘルパーを自分が使えるということを知らなかったという話もあるように、他にも自分は知らず、当事者間の情報共有で知ったサービスなどはあるのだろうかということが気になった。

ロービジョンの支援はまだ不十分であるとお話を聞いて感じた。「医療は退院したら・治らなければ対象ではない」この言葉はどの障害でも言える。卒論で医療的ケア児を調べていても言われていた言葉だった。医療側にも SW が絡んでいく必要がある。実習で行った地域では、行政と繋がりのある人が地域の高齢者が集まる会を開いていた。これにより、高齢者のニーズや隠れた地域のニーズを把握していた。このように、行政からアプローチしてくれると繋がり易いと考える。しかし、この行政と繋がりのある人は熱心な人であったため実現できたことであって、この人がいなくなれば繋がりがなくなってしまうという懸念があった。職員によって左右されるという現在の行政の姿勢は改善すべきだと、今日の話聞いて改めて感じた。

治せない病気は医療の範囲外であり「来なくていいよ」といわれてしまう、福祉情報や進捗を機関の方から連絡されない、行政・市役所も申請できる内容も分からないのに申請主義であるというお話を聞いて、医療や行政の期間に対して大変腹が立ちました。世の中は全然優しくないなと思いました。市役所もグループあかりのパンフレットを配ってくれているのか、地域にいる人同士をつなげる気持ちがあるのかそこで働く人の変えようとする意識が足りなさすぎると思いました。交差点等で声をかけてくれると嬉しいとおっしゃっていましたが、確かに私にもどうかかわればいいのかわからないという気持ちもありました。ラッキーだけではなく必要な人と必要なタイミングでつながれるように私自身の意識も変えていきたいです。

今回の話の中で最も印象的だったのは、医療機関や行政機関との連携が十分になされていないという問題である。病院で診察を受けた後に次の支援へと繋げたり、行政から様々な支援の情報を発信するなど、支援の輪を広げていくことで、より多くの人を丁寧に支援する体制が構築されていくのではないかと考えた。そしてその役割こそ、社会福祉士が積極的に負うべきものであるとも、改めて痛感した。

★(ろう)印象に残ったのは、医療機関に関するお話である。突然見えなくなり、不安などといった気持ちを抱えながら病院に行ったのに「もう治療できないから家に帰ってください」と言われたというお話があった。目が見えなくなった人々にとって最初の一步は医療機関(眼科)へ行くことなのに、そこで福祉情報や今後の生活について相談することが出来ない。見えない世界に取り残された人々の気持ちについて医療機関はどう感じているのだろうか、と感じた。また、市役所職員の人が情報提供するだけではなく、視覚障害者の集い場(グループ)と本人との相性について考慮したり近所に住む視覚障害者と会って悩み相談する機会を設けたりするなど様々な提案をしてくれたことから、様々な知識を持つことの重要性を学んだ。どういう人が集まっているのか、年齢層などグループの特徴などを熟知し、対象者にとって最適な方法を提案できるように努力したいと思った。

清瀬視覚障害者グループあかりの皆さんが、視覚障害体験の福祉授業を行っているということを知った。福祉授業について、「障害者に限らず、自分の身の周りの人を気に掛け、何に困っているか想像する力を身につける」ということが大切であると教えていただいた。私は以前から、インスタントシニアや障害の疑似体験の授業の難しさについて感じていたため、当事者の方からの答えをいただけたようで嬉しかった。

千葉市社会福祉協議会、福祉教育ニュース、「障害の疑似体験」見直してみませんか～千葉市福祉教育講座を開催しました～」、令和元年12月号、

<http://www.chiba-shakyo.jp/vc/wp-content/uploads/2020/01/fukushikyoikunews56.pdf>

(前略) 以前は、子ども同士で目隠しをしてガイドヘルプ体験を行っていましたが、子どもからは「真っ暗で怖かった」「こんな怖い思いをしている視覚障害のある方は気の毒なので助けてほしい」といった感想が多かったそうです。当事者の方が日常生活の工夫や楽しい話をしても、体験によって、子どもたちには障害のネガティブな部分ばかりが印象に残ってしまうのです。これでは「障害者は気の毒な人」という「貧困な福祉観」を作り出してしまうことになります。

そこで、子ども同士ではなく、視覚障害のある当事者の方をガイドし、交流を重視するプログラムに変えたところ、「目が不自由でも色々なことができるのだと思った」という感想が増えたそうです。

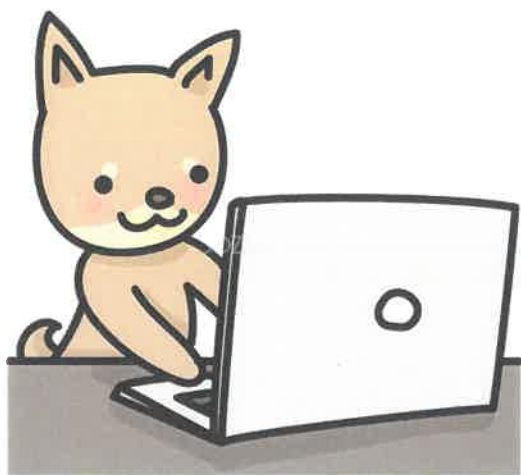
(中略) 疑似体験は、あくまで「気づく」きっかけとして実施されるもので、その後の展開が重要です。障害の有無に関わらず誰もが「対等な個人」であることを理解し、「共に生きること」「それぞれ違いがあっても当たり前のこと」を伝えることが大切です。

後天的に盲になった方のきっかけ・視野・色や見え方・視力など個別性が高くそれぞれであると改めて思った。盲者の方など困っている人は助けたいと常々思っているが、いつどのように声掛けをするか迷いがあったので今日一例を知ることができて良かった。明かりの会の活動によって参加者が情報を得るだけでなく、主催者側も行政に働きかけるきっかけになるというのは、両者にとってメリットのある活動であると感じた。急に病気になって障害を持つようになったら、情報もなく不安になる人がほとんどだと思う。そうなったときにすぐに支援につながるような活動が病院をはじめとする様々な場所で必要であると思った。また、これらの活動の推進にソーシャルワーカーの働きが期待されるだろうと思った。

信号は色で判別できない分、上や下など位置で覚えることや、交差点や駅のホームなどで視覚障害者が困っている時の声のかけ方など、当事者の方から具体的な例を聞いて勉強になった。また、白状を持っていると過剰に配慮されてしまったり、反対に、白状を持っていないと視覚障害があることに気づかれなかったり、言葉で説明すれば理解できるのになかったことにされてしまったり、適切な配慮を受けられていない現状があるとわかった。また、

病院は、順路やドアなど、色で説明されることがあり、色を判別できなくて困るというお話など、今まで意識していなかったことにたくさん気づかされた。また、「医療は必要ないと言われたようで絶望した」という言葉が印象的であり、耐えるか諦めるかの生活を何年も続けたというお話を聞いて、病気を治すことはできなくても、これからどう生きていけばよいのか情報や支援を得られるか得られないかで、その人の人生は大きく変わってしまうのだとわかった。また、行政は、当事者側から働きかけないと情報を提供してくれなかったり、部署間の情報共有が不十分で、担当者によって対応に差が生まれてしまったり、様々な課題があるとわかった。また、「無関心ではなくアンテナを張って気づけるように」という言葉を聞いてなるほどと思い、日頃から意識していきたいと感じた。

視覚障害者を中心とする 聴覚障害者支援者のための PC テイカー研修会



清瀬市の社会人3名、学生8名が、5～8月毎週火曜日と土曜日に聴覚障害者のためのPC テイクの研修会を開催。(以下は教材。)

何が食べたいか
何か食べたいか

バスで来る
バスが来る

何も消えていない
何もかも消えている

テレビを見る
テレビで見る

毎日来てもいいよ
いつでも来ていいよ

学校へ案内する
学校を案内する

彼は彼女のカバンを隠す
彼は彼女とカバンを隠す

物が落ちる
物を落とす

彼に相談する
彼と相談する

人が集まる
人を集める

彼は車で来た
彼の車で来た

戸が開く
戸を開ける

自分が選んだコース
自分で選んだコース

右から2つめを取ってください
右から2つ取ってください

お寺へ案内いたしましょう
お寺を案内いたしましょう

家族がハワイへ行く
家族でハワイへ行く

彼女は泣いているんじゃないか
彼女は泣いているじゃないか

子どもたちがハワイへ行く
子どもたちでハワイへ行く

彼を医者にする
彼は医者になる

みんなは犬を飼っている
みんなで犬を飼っている

コロナの夏「フレイル注意報」

新型コロナウイルス感染を避けようと、外出を控えているシニア世代は多いと思いますが、家に閉じこもっていると、筋力低下やストレスから、介護が必要になる一歩手前のフレイル（虚弱）におちいるリスクが高まりますね。

感染対策と熱中症に気をつけながら、筋トレなどの運動を取り入れてみましょう。

「コロナの自粛に加え、夏の暑さで家の中でずっと座っていたりすると、筋力が低下して転倒や骨折をしやすくなって、会話が減ったり、認知機能が低下する恐れがあるんですよ」と国立長寿医療研修センター理事長の荒井さんは話しています。

高齢者の筋肉の衰えは早いです。特に足は弱りやすく、普通の生活で数年かけて低下する筋力が、動かないと1週間ほどで失われ、あっという間に歩けなくなってしまいます。

「こうしたフレイル状態になるのを防ぐため、運動が大切です。感染症への抵抗力を高めることにもつながります」と荒井さんは話しています。

仲間と楽しみながら行くと、より効果的というが、今は感染症予防も不可欠ですが、そこで、仲間と室内で活動する際の「8つの工夫」を提案しますね。

基本的には、①楽しく行う ②喚起する（1時間に2回以上）

③距離を開ける（なるべく2m、最低1m）

④人数が多いときは時間帯を分ける

⑤手洗い、消毒をする ⑥マスクをする

⑦水分を取る ⑧体調を確認する

荒井さんは「室内で運動する際はクーラーをつけることや、高齢者は口の渇きを感じにくいので、特に水分補給を忘れないように」と指摘しています。

食事とは別に、1日あたり500ccのペットボトル2本分の水分を取るのが目安だといいます。

どんな運動が効果的でしょうか。

スポーツ医学に詳しい筑波大学教授の久野さんは「家で簡単にできる 3 種類の筋トレがお勧めといます。何歳からでも鍛えれば筋肉量は増えるので、ゆっくり負荷をかける動作を繰り返すのがコツ」だと話しています。

一つは、下半身をバランスよく鍛える「イスを使ったスクワット」

おしりを後ろにつきだす感覚でひざを曲げます。

次に太ももを鍛える「ひざ伸ばし」、もう一つは大腰筋（だいようきん）や腹筋を鍛える「もも上げ」いずれも 8 秒間、声を出して数えながら行うといいそうです。10 回 1 セットで、初めは 1 日 1 セット、週に 3 日以上が目標。慣れたら回数を増やしていくといいようです。

筋肉痛がでて、筋トレが効果的な証拠なので気にしなくてもいいとのこと。ただし、足をひきずるほど痛い場合は、医師に相談してくださいね。効果を感じても継続することが大切です。3 か月続けても、やめると 3 か月程度で元に戻りますからね。

「筋トレに加えてウォーキングで代謝や血管の衰えも防ぎたい」と久野さん。外に出て季節を感じたり、人と笑顔を交わしたりすることにも健康効果があり、外出を控えていても、これは、「必要な外出」ととらえましょう。

夏のウォーキングは、水分を取り、夕方や朝方の日差しがきつくない時間帯を選ぶといいですね。歩けない日もあるので、目標は 1 日単位ではなく、1 週間で 5 万 6000 歩から 7 万歩を目安にするといいと思います。

久野さんは、「運動すると気持ちよさを感じる物質が分泌されて、徐々に疲れにくい体になるので、楽しみながら続けてほしい」と話しています。

参考資料「読売新聞 8 月 12 日 「安心の設計」

デジタル教科書

文部科学省は小学校の教科書が改訂される 2024 年度から、デジタル教科書の本格導入を目指している。

21 年度の 1 年間 22 億円を投じてデジタル教科書が無償配布し、課題や効果の実証事業を行う。本社アンケートに回答したのは 744 市区（回答率 91%）。紙からデジタル教科書への全面移行について聞くと、「賛成」が 32%と「反対」の 27%をわずかに上回ったが最も多い回答は「分からない」41%だった。

「賛成」の教育委員会は「登下校の荷物の軽量化」「動画や音声など視聴覚教材が豊富」などを理由に挙げた。「反対」からは「デジタルのデータは頭に入りにくい印象。紙の教科書や黒板、ノート等従来の学習が必要だ」、「一昨年台風で停電が続いた。そんな時、デジタル教科書だと何もできなくなる」などの声が聞かれた。「わからない」の理由は「影響や効果が不明で不安がある」や、「自治体の予算面の負担や児童生徒への健康面への影響がわからない」「メリットデメリットを見極める材料が少ない」など、性急な議論への戸惑いが見られた。

具体的に懸念する点も明らかになった。懸念があるとした 642 市区に複数回答で聞いたところ、「教員の ICT 指導力」「視力など健康面への影響」「校内外の安定的な通信環境の確保」「書く時間の減少」の順で多かった。

ゲームなど目的外の使用を心配する教育委員会も 18%あった。

紙に書くことで、どのページのどの場所に何を書いたか、という空間的な配置を意識せずに覚える。一方、端末の情報はスクロールすれば見えなくなり一覧性も乏しく忘れる確率が高い。紙の特性が記憶力や思考力創造力を育み、より深い理解を促す。教科書の不用意なデジタル化は避け、主として紙の教科書とノートを使った教育を続けるべきだ。

読売新聞 2021、03、27 掲載記事

コロナ対応のシステム

新型コロナウイルスの感染拡大で消費者の行動が変わりました。

商品ごとに購入する店を決めている人は多いですが、できるだけ買い物の回数を減らそうと、使う店舗を絞り込む動きが見られます。

その際、買うものを事前に決めるなどして、店内での滞在時間はできるだけ短くしようとするようになりました。

こうした変化に店側はどう対応すればいいのでしょうか。一つはスーパーやコンビニエンスストアで増えているセルフレジの導入です。客がレジで読み取り機に商品のバーコードをかざすなどして精算するタイプが多いですが、一部では客が売り場でスマートフォンなどのカメラ機能を使って商品のバーコードを読み取り、レジで待たずに支払いができる仕組みも登場しました。

これが進めばレジは入らなくなり、精算を待つ混雑も減ります。

多くのスーパーは入り口から順に野菜や魚を配置し、最後にレジに並んでもらうような店作りをしていますが、見直される可能性もあると思います。

また効率的に買い物ができることも大事です。例えばホームセンター大手のカインズはスマートフォンのアプリで欲しい商品の場所が分かるようにし、客はスマホを見ながら商品を探します。店内が広くてどこに目当ての商品があるのかすぐには分からず、忙しそうなお店員に話しかけるのは気が引けるといって、客の不満を解消しています。在宅勤務が増え、店内の配置に不慣れな人が来店する機会も増えるでしょう。

こうした人でもスムーズに買い物ができるような仕組みが必要です。

外出を控える動きを背景にネットスーパーの利用も増えました。宅配業者が配達物を手渡さず玄関先などにおいて済ませる置き配の広がりや、商品が届くのを家で待つ必要は減り、より便利になってきたこともあります。

イトーヨーカドーが配達予約できる日数を増やすなど、店側もサービスを強

化しています。ただ、店側にとっては課題も多い。需要が急激に増えたので十分に対応しきれいていません。売り場の担当者は来客の対応が主な業務です。

ネットスーパーの商品を選ぶ担当者は注文を優先させるので、店内での対応がちぐはぐになることもあります。また生鮮食品の鮮度をどう保つかも難題です。野菜などをネットで頼んで 10 回に 1 度でも傷んでいると怒られてしまう。

自分で買い物をした時よりも厳しい対応になるのは、ネット通販はこれまで加工品が中心だったので、消費者はきちんとした商品が届くのが当たり前だと思いがちだからです。

車社会の米国ではネットで注文、精算した商品をお店で受け取る「クリック＆コレクト」と呼ばれる仕組みが定着しています。

中でもウォルマートの「ピックアップタワー」は話題です。オレンジ色の巨大なロッカーのような形をしており注文した商品が店で受け取れます。

受け取り時の来店で注いで買い物も期待でき、店舗の数が減っても売上は伸びています。

日本でもイオンが商品を注文し、設定した時間帯に店の駐車場に行けば店員が商品を詰め込んでくれるドライブスルーサービスを始めています。

依存社会 スマホ

千葉県の高校三年生の女子生徒は 5 月学校での検診で初めて斜視の疑いがあると言われた。

高校入学後目に違和感を覚えることが増えた。

中学時代に 1.5 あった視力が 1.0 と 0.6 に下がりかわきや疲れを感じる。

原因として思い当たるのはスマホへの依存だ。

片道 1 時間の通学中ほとんど動画を見て過ごす。

新型コロナで休校中は授業もスマホ動画で受けていた。1 日のほとんど画面を眺めて過ごしていたという。

スマホを長時間見続けることで急性内斜視を発症するケースがある。

黒目が内側により視線がずれる症状だ小さな画面を 20 センチ程度の近さで見続けると両目は内側に寄った状態になり長時間続くと目を動かす筋肉が固定されてしまうことがある。

5～6年ほど前から手術が必要な患者が増えてきたと感じる。

日本弱視斜視学会などが行った調査では、回答した医師 371 人のうち 122 人が 2018 年の 1 年間でスマホなどの使いすぎが原因とみられる急性内斜視の子供や若い患者がいたとした。

深刻な事態として現在実態調査をしている。スマホの長時間使用で目のピントが合いづらくなり手元がぼやける症状に悩む人も増えている。スマホ老眼と呼ばれる症状だ。レンズの役割を果たす水晶体の厚さを変える毛様体筋が水晶体を厚くした状態で凝り固まり、ピント調整ができなくなる。

正確には「調節緊張」という症状で、加齢による老眼とは異なる。

最近は目が疲れたと訴える 20 から 30 代が多くなった。スマホ普及前にはなかったと指摘。仕事でパソコンを使った後、休憩中にスマホを見ていたら目が休まらなると注意を呼びかけています。

スマホを使う姿勢は首への負担も大きい。成人の頭は平均で約 6 キロ、スイ

力ほどの重さがある。スマホを見る時は約 30° うつむく姿勢となり首の後ろ側の筋肉に直立時の 3 倍の負担がかかると説明している

首の後ろには自律神経が集まっており、この筋肉がこると副交感神経の動きが低下。全身のだるさや不眠などを引き起こし、うつ病の原因となることもある。

15 分スマホを使ったら、椅子の背もたれに寄りかかって手で頭の重さを支え 30 秒間天を仰ぎ、首の後ろの筋肉を緩めると話している。

片手で持ったスマホを操作するため、親指を動かすすぎて手首が腱鞘炎を起こす人もいる。手には筋肉と骨を結びつける腱が通り、それを取り囲むトンネルのような腱鞘がこすれ、炎症を起こすという。

正式には「ドケルバン病」だが、最近は「スマホ指」とも言われている。

無意識にスマホに没頭することで健康が脅かされることもある。意識的に休憩を挟みながら上手に付き合っていきたい。

9月には秋雨前線や台風の影響を受けるため、東京では1年の中で最も降水量が多くなります。

台風10号は九州に大きな被害をもたらしましたが、適度に降ってもらいたいと願っています。

雨の日に欠かせないのは傘です。私たち気象予報士が傘を持つときも、人それぞれの個性が表れています。

そんなことを思ったのは、取材で「傘ソムリエ」を名乗る方にお目にかかったからです。傘の内側に優しくアイロンを充てることで撥水機能が復活する、傘は大きければいいというわけではなく、私のように小柄な人だとバランスが安定せずに逆にぬれてしまう。

目からうろこでした。

私自身を振り返ると、なんとも雑に扱っていると気が付きました。晴雨兼用の折りたたみ傘のほかに持っている多数のビニール傘を見て、「ごめんなさい、傘」と思います。出先で降られた時に、その都度買っているからです。置き忘れることもしばしばあります。

気象予報士なのに？と思われるかもしれませんが。言い訳すると、雨がふるのはわかっていたのですが、持っていくのを忘れたケースが一番多いです。

番組で「傘を忘れないでくださいね」といっているのに。たまに、予想した時間がずれてしまい雨に降られることもあります。

悔しい気持ちでビニール傘を買ったり、反省しながら雨にぬれて帰ったりします。

周囲の気象予報士たちの傘との付き合い方も人柄がよく表れています。

先輩の男性気象キャスターは、バッグに必ず折りたたみ傘を入れています。

「テレビで気象予報をしているのに、傘がなくて雨にぬれることは信頼を失う」

というようなことを話していました。立派です。でも、雨が降らないと予想しながら傘を持っているのは、かえっていぶかしく思われるのではないかと口から出そうになりましたが、先輩なので、「さすがですね」とうなづいてしまいました。

傘を持ち歩かない派もいて、雨が降る時間を予想してその時は出かけないという話もたまに聞きます。残念ながら予報がはずれると私と同様に、出先で悔しながら傘を買うようです。

変わっているのは、後輩の気象予報士。そもそも傘をさすのが好きではないので、傘を持たないけれど、傘がなくて困っている人を見かけたら、ビニール傘を買って渡しているそうです。

傘との付き合いはさまざまですが、お気に入りの傘を持つ人は、私の周りにはいません。私も含めて傘への愛とリスペクトが不足しているようです。

私も子どもの頃は、お気に入りの赤い傘がありました。その傘を差しながら家族と並んで歩くのが楽しみでした。

皆さんも、洋服やバッグや靴といったファッションアイテムは複数持っていて、その気分や会う人、目的に合わせて選んでいると思います。

傘はどうですか？お気に入りの一本があればどんよりした日も少しは気分が晴れるかもしれません。ちなみに傘は大雨で冠水した道路を歩いて非難しなければならぬとき、足元の安全を確かめるための杖としても使えます。優しい雨の日も、危険な雨の日も、私たちを守ってくれるものといえるかもしれません。愛情をもって、大切に使いしていきたいと思います。

読売新聞 2020年9月13日掲載文

古いトランプに魅せられて

骨董屋をやっていると、いろいろなリクエストがあるんですよ。

二十年前になりますが、店を開店して間もなく、「古いトランプが手に入ったらほしい」というお客様がいらっしたんです。

トランプといっても多様なんですね。まず思い浮かべるのは、企業が販促物として作ったものなどのコレクションでしょうか。

でも、私は木版で刷った1880年以前のものに狙いを絞りました。

骨董品を仕入れるために、年に四~五回ヨーロッパに行きますが、私が古い陶磁器や、銀器、レースを探す場所ではトランプは見つからないんですね。

しかし、そのうち、海外のコレクターがコレクションを手放す話が舞い込んだりするようになって、ひょんなきっかけで古いトランプを扱う業者と知り合いになったりして、少しずつ集まってくるようになったんです。

お客様からの依頼だったのが、いつしか自分がその魅力のとりこになっていたんですね。

トランプの始まりは九世紀の中国にとり、十四世紀のエジプトともいわれているんです。人々がトランプの歴史に興味を持ったのはここ数十年なので詳しいことはわからないんですが、イタリアの教会に残っていたお坊さんの日記、小説の何気ない一行、課税した時の領収書やちょっとしたメモが資料になっていることがあるんですね。

日々、新しい発見があって、トランプ史は進化し続けているんですよ。

現在、私たちの手元にあるようなトランプの原型は、十四世紀後半のヨーロッパ、スペイン、イタリア、フランスで広まったものであります。

もともとエジプトで賭け事や遊びの道具として使われていたものが、貿易商によりイタリアやスペインを通して隣国フランスへ伝わったんですよ。

イタリアやスペインでの絵札はキング、馬上の騎士、歩く従者で、クイーン

はなかったんです。

マークとしては剣、カップ、コイン、棍棒の四種だったんですね。

現在もイタリアやスペイン、ラテン系の国では棍棒や剣トランプが主流となっているんですよ。

日本社会事業大学 専門職大学院

「ハイブリット授業紹介」

院生のほとんどが仕事を継続していますので、遠方から学びたいという方、あるいは仕事が少し遅くまでかかるという方にとってはズームで授業に参加できるというのはとてもメリットがあると思います。

一方で対面だからこそその価値もあると考えています。例えばゲストに来て頂いた時、あるいはゼミでそれでも実践課題研究について話し合っている時、また自分と向き合うことそれも対面を通じてできることかなと考えています。

大学としては選択肢を多様に活用するのが大事なので、対面とズーム両方で授業が受けられるように体制を整えているところです。

仕事終わりでどうしても移動ができなかつたりするので、仕事場で授業をうけることもあり、ズームはすごく助かりました。対面で授業を受けると、なまの先生の話がうかがったり、ちょっとした気づきなどを質問して、すぐに先生といろいろな話ができること 私はとってもいいなと思っております。

私は卒業後、北海道から、修習生としてゼミや授業に参加しています。

ハイブリット授業になったおかげで、教室の雰囲気もよくわかるし、北海道からズームで参加できるので大変助かっています。

専門職大学院ゼミというのは、専門職大学の授業の中で最もエキサイティングな学びの場です、と申しますのは実践課題研究を進める場であるからです。

これは最初、ズームでやる、あるいはズームと対面のハイブリッドでやるってというようなことが本当にできるだろうかと心配だったんです、けれども試行錯誤しながら半年が経ちまして今はとても手応えを感じています。

ズームだけだと、本当にその方とお話する機会がないのでこうやってくると対面の場に来ると、温度感が伝わってくるみたいな形でいいな一って思います。仕事が忙しいのでズームがあることで参加はだいぶしやすいなと思います。

実際に通ってくると、本当に直接お会いすることで、休み時間とか帰り道とか

色々なお話できたりとか、それはそれで楽しく、あとは併用しながらやっていきたいなと思います。

忙しい時、時間のないときはズームで、対話を深めたい、思考を深めたい時は対面でこれからやっていこうと思います。

時間的あるいは距離的な制約を解消するならズームで、もう少し立体的に学びたいならば対面の授業を受ける。

2つを選択できるのが、ハイブリッドの授業のいいところはないかなと思っています。

熱中症

本格的な夏を迎えるにあたって気を付けたいのが“熱中症”だ。

熱中症は、高温多湿な環境に長くいることで体温調節する機能がうまく働かなくなり、体内に熱がこもった状態になることだ。めまいや頭痛、吐き気、けいれんなどの症状が現れ、場合によっては救急搬送されたり、死亡することもあるという。

熱中症予備軍の隠れ脱水症の見つけ方

危険な状態になる前にいち早く気づき、重症化しないよう対応することも重要となる。そのような中で今、厚生労働省で公開している「熱中症予備軍の隠れ脱水症の見つけ方」を、ある Twitter ユーザーが紹介したことで注目を集めている。セルフチェックの方法は、片方の親指の爪を反対の指でつまむだけ。つまんだ指を離し、白くなった爪の色が元の色に戻るのに 3 秒以上かかる場合は、脱水症を起こしている可能性があるという。

爪でのセルフチェックだけでなく、尿の色を確認して脱水症状を判定する方法もある。色が濃くなるほど体内の水分が足りず、「隠れ脱水症」が疑われるという。

判定チャートは、①水分を十分に摂取しているから、②コップ一杯の摂取を勧める、③1 時間以内に 250 ミリリットルをとってほしい、④今すぐ 250 ミリリットルの摂取を促す、⑤今すぐ 1000 ミリリットルの摂取を促すまでの 5 段階。

重症化する前に対応・対策をし、自分の身を守ることは大切なことだ。特に、さらに暑くなっていく夏に向けては、ふとした際に手軽に体調を確認しておくことを習慣にしておくのもいいかもしれない。

しかし新型コロナウイルスの影響で、まだまだマスク着用が続く今、「マスク着用での熱中症」もより心配になってくる。

コロナ禍だからこそ気を付けるべき熱中症への対策

マスク着用で熱中症リスク高まる

令和 2 年 6～9 月の全国における熱中症による救急搬送人員の累計は 6 万 4869

人となっています。また、令和元年の熱中症による死亡者数は 1224 人となっています。現時点では熱中症に対する新型コロナウイルス感染症の影響は、明らかにはなっておりません。

熱中症予防には、どのような方法がいいのか？

暑さを避けるため、室内では扇風機やエアコンで温度を調節する。遮光カーテン、すだれ、打ち水を利用する。室温をこまめに確認する。WBGT 値（気温、湿度、放射熱から算出される暑さの指数も参考に）する。等の対策を取ってください。屋外では、日傘や帽子を着用する。日陰の利用、こまめな休憩を心がける。天気の良い日は、日中の外出をできるだけ控える。等の対策を取ってください。また、「からだの蓄熱を避けるために、通気性のよい、吸湿性・速乾性のある衣服を着用する」「保冷剤、氷、冷たいタオルなどで、からだを冷やす」ことも有効です。

更に、室内でも、屋外でも、のどの渇きを感じなくても、こまめに水分・塩分、スポーツドリンクなどを補給してください。

新型コロナウイルス感染症予防のため、マスク着用の機会が多くなっていますが、高温や多湿といった環境下でのマスク着用は、熱中症のリスクが高まるので、屋外で人と十分な距離（2メートル以上）が確保できる場合には、マスクをはずすようにしましょう。

また、マスクを着用している間は、以下の点にご注意ください。

- ・強い負荷の運動や長時間（目安として 1 時間以上）の運動は避けてください。
- ・水分を摂る回数が、気づかないうちに減ることがあります。のどが渇いていなくても、こまめな水分補給を心がけましょう。
- ・周囲の人との距離を十分にとれる場所で、マスクを一時的にはずして休憩することも必要です。

室内冷房中に、窓開けによる換気を組み合わせる場合は、外気温の低い朝や夕方以降などに、窓開けを行い、換気時間を多く取るなど、室温が上がらないよう工夫いただくことを推奨します。

「福祉」とは何でしょうか。「福祉」に最も意味が似ている言葉は「幸せ」や「幸福」といわれますが、実際は、どうなのでしょう。

幸せと福祉の違いはいくつかありますが、その中でも『幸せ』は人より自分、といった利己的なところがある一方、『福祉』は“みんなで”や“全体で”というニュアンスがある」という違いに着目して考えてみると、福祉とは「すべての人の幸せを最大限にすること」といえます。

では、「みんなが幸せになる」とはどういうことでしょうか。掃除をしたご褒美に、大きなケーキをいただいたとします。掃除をろくにしなかった人、甘いものが苦手な人など、さまざまなケースが考えられるため、みんなでただ等分するだけでは「公平さ」と「個人差」の点で問題が生じます。

こうした公平さの問題を議論し、法律・制度のあり方や歴史を学ぶのが「政策論」、個人差についての問題を扱うのが「援助論」です。社会福祉とは、どうすれば「みんな」が幸せになれるのかを考え（政策論）、「一人ひとり」の幸せを実現する（援助論）ための学問です。

こんにちは。福祉心理学科の渡部と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。今日はですね、福祉心理学科のご紹介ならびに福祉心理学科で入学後、どういう風なことを学ぶのか、そういった値について少し参考になるようなお話をさせていただこうと思っております。

まず福祉心理学科ですけれども、読んで字のごとくなんですけれども福祉と心理学といったものを全体的に総合的に学ぶ学科です。

ですから心理学を活用しながら福祉の世界で貢献ができるそういった人材育成っていうことを考えております。

理論を学ぶだけではなくて理論を学んだ後、その後どういう風実践の中で活かしてかってところがとてもとても大切になります。

ですから福祉学科では一人一人の幸せを全体として考えますし、また生活の質ということでクオリティオブライフっていう考え方ありますけれども、一人一人の生活の質を高めるためにはどういう風な理論と実践の貢献をしていけばいいのかっていうところで、まあみなさんが入学後は学ぶことになると思います。じゃあどういう風な学びをしていくのかということなんです。入学後心理実践力と言いますけれども、まあ心理学をどういう風に活用し応用するかそういった視点で学んでいただきたいなっていう感じがします。つまり心理学をどう活かしていくかってところなんですけれども、それは自分のためでもあるし人のためでもあるんですね。そういう意味で自分自身の問題とか生き方とか将来的な自分の心のあり方とか、そういったところに貢献できるものが福祉で得ることができると思います。あるいはまた人々のために専門的な知識とか経験を持ちながら対応していきたい、援助して行きたいっていう方にも福祉心理学ってのは有効にいろんなことを提供することは可能だろうと思います。

まあそんな中で大事なことってのは人を総合的に見ていくっていうことです

よね。つまり部分部分で見るのではなくて色々なものがその人の中には備わっているそれを大事にしていくっていうことが、ひいては人間を大切に思っているところに繋がっていくと思います。

総合的な人間理解、あるいはまたそれを通して深く深く人との関係性を築いていくそういったところが福祉心理学科で学べるところだろうと思います。あるいはまたコミュニケーションということで相手のことを理解し自分のことを理解しながら違う人間であるということをお互いに了解しあってその上で適切なコミュニケーションを取ってくってことになります。いま皆様方の中でコミュニケーションが苦手とってらっしゃる方いるかもしれませんが、心理学を学び福祉心理学科でご自分の実践経験を積み上げることによって人とのコミュニケーションに自分の思いを相手に伝えたいとか相手の気持ちを受け止めたいとかっていうことが比較的可能になってくるスムーズになってくるってことが学科で学ぶことでできると思います。

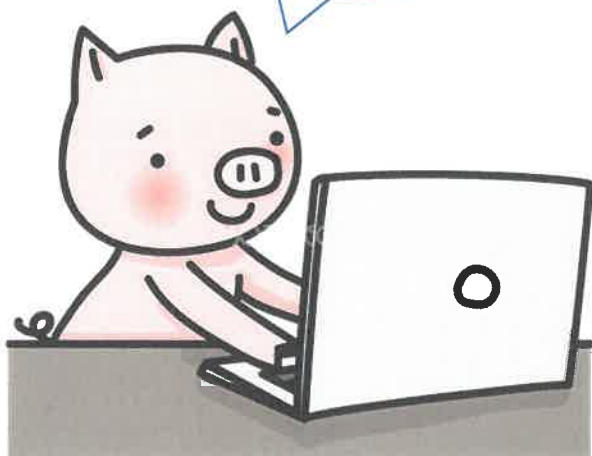
あとはですね社会に貢献してくというそういう力が必要になってきますんで、ただただ自分の狭い世界の中では心理学を学んだからそれでいいということではなくて社会の中に出て自分自身の力を発揮したいとか、あるいはまず自分の能力をフルに活用しながら社会に貢献してくっていうことも大切なると思います。そういった自信とか自分でもできるのではないかという可能性ひいては夢を実現してくるっていうところにも福祉にわかったのは影響を与えてくものだろうと思います。まあそんなわけで、人間力とかあるいは社会人力と言われますけども、学部学科の勉強だけではなくて将来を見据えて自分自身が自分らしく尚且つ社会に貢献できるようなあるいはまた人間として豊かな人間性をもてるようなそういう風な人材育成を福祉心理学科では皆様方には入学していただいた後、一生懸命教員一同へと努力職員と協力しながら進めていきたいと思っておりますので是非、福祉心理学科の門をたたいていただければなと思います。

聴覚障害者を中心とする 盲・盲ろう者のための コミック言語化作戦

ゴルゴ13だよ



リボンの騎士、
ついに完成よ！



コミック『ゴルゴ13』と『リボンの騎士』を盲ろう者でも楽しめるようにできるか。

『ゴルゴ13』の「FRIENDS」と「ミクロの油田」をデータ化。

『リボンの騎士』は全話をデータ化達成！

盲・盲ろうの方、おひとりずつに貸し出します。



Amazon HP より



申し合わせ

ページ数、コマ数を明記。セリフ以外は（ ）に入れる。

その他見本（ゴルゴ13『FRIENDS』で作成）と同じ形式にする

【見本】

ゴルゴ13

FRIENDS

両開きの上方にタイトル

FRIENDS フレンズ ヘンリー&スティーブ PART 1

p.4 (コマひとつのみ)

1990年ケンブリッジ…イギリス…

絵(ケンブリッジの建物が並んだ景色。左手前に尖塔が見える。)

p.5

コマ1

ケンブリッジ大学……

絵(ケンブリッジ大学のキングスカレッジの教会、2本の尖塔が角のように建っている有名な建物を背景に小さく人々が描かれている。中央に三人、左奥に二人、左手前に二人歩いている。手前はケム川が流れている。ボートでパンティング、つまり立って棒を川底に立てて進めるボートの漕ぎ方をしている人と座っている人が一番手前に小さく描かれている。)

コマ2

絵(男性があおむけにプールで泳いでいる。)

コマ3

絵(プールサイドにテーブルと椅子があり、水着にシャツを羽織った男性が座ってひとりでチェスのコマをつまんでいる。)

p.6

コマ1

絵(泳いでいた男性が梯子を上ってプールサイドに上がろうとしている背中。テーブルのチェスの男性はこちらを向いている。)

コマ2

絵(画面の右にチェスの男性。しゃべりながら右手をあげている。左奥に、プールから上がった男性はこちらを向いて頭に手を当てている。)

チェスの男性「やっと試験あけだ。飲みに行くか？それとも久しぶりに、玉でもつくか？」

コマ3

泳いでいた男「よしスティーブ、ビリヤードで勝負下後に飲むか！」(ここで髪の毛の短いひとりでチェスをしていた男性がスティーブとわかる。)

絵(左、喋りながら頭をタオルで拭いている男性の顔だけが大きく描かれている。右に聞いている男性。)

コマ4

絵のみ（上から映したような画像。タイルのような歩道が描かれていて歩道の上を二人の男が歩いている。手前に後ろ姿の女性が三人並んでいる。）

コマ5

絵（女性三人がこちらを向いている。）

右の女性「ヘンリーだわ、水泳からラグビー、恋愛に至るまで華麗にこなし、“必ず勝つ男”と言われている。女性の扱いも噂通りか、確かめてみたいわね、ふふ！」

（ここで泳いでいた髪の少し長い男性がヘンリーだとわかる。）

p.7

コマ1

絵（右に女性三人。左奥に男性二人。後ろに木が二本。）

真ん中の女性「私は、スティーブのほうがいいわ。彼、IQ150って噂よ、テキサス高校生時代に秀才で有名で、地元の政治家の奨学金を得てここへ来たらしいの……」

コマ2

絵（二人の女性の顔だけが大きく。）

右の女性「私をテキサスに連れてってこないかぁ……」

左の女性「あの二人嫉妬するくらい、いつも一緒ね。“獅子と狼”ってところかしら……」

コマ3

絵のみ（ヘンリーとスティーブ。奥に三人の女性が小さく。さらに奥に木が三本。）

コマ4

絵のみ（おそらくケンブリッジのカレッジらしき建物に向かう道。建物に向かっている人が二人。建物からこちらに歩いている人が三人。両側に木立が並ぶ。）

p.8

コマ1

絵のみ（夜の景色。黒い空に浮かび上がる建物。手前右に連れだって歩く男女の背中。左の建物の前に自転車が停めてある。その奥に車が見える。）

コマ2

絵（上から歩道が描かれている。男性二人が肩を組んで歩いている。）

右の男性「お前、テキーラの飲み過ぎだよ。」

左の男性「まだまだこれからだ、もう一軒だ。」

コマ3

絵（男性二人の顔）

右の男性「ん？女の悲鳴のような声が、聞こえなかったか？」

左の男性「女ぁ？空耳だろう。」

コマ4

絵のみ（夜空を背景に建物の1～2階が画面のほとんどを占めている。）

コマ5

絵のみ（上から歩道を見下ろしたような絵。右側に髪の毛のぎざぎざに立った男性と短いモヒカンの男性とミニスカートにヒョウ柄のシャツの女性。左側、三人に対面して女性。黒い長い服にヒジャーブをかぶっている。）

【『リボンの騎士』全巻完成】

目次

右上にタイトル「リボンの騎士」①(1巻のこと) Contents

右から順に

- 第1章 むかしむかし…7
- 第2章 花と閲兵式…21
- 第3章 謝肉祭…39
- 第4章 競技大会…55
- 第5章 牢獄の王子…75
- 第6章 即位式…97
- 第7章 棺桶塔のサファイア…115
- 第8章 リボンの騎士登場…135
- 第9章 ばか王のいいなずけ…151
- 第10章 悪魔のささやき…165
- 第11章 石きり場のふたり…181
- 第12章 魔女の館…205
- 第13章 なげきの白鳥…233
- 第14章 ふたつの心…267
- 第15章 石になった王妃…293
- 第16章 海賊ブラッド船長…315
- 第17章 さんざしの森のできごと…347
- 第18章 子ネコと天使…383
- 第19章 ヘル夫人の要求…417

6 ページ

何も描かれていない

7 ページ

絵(上にタイトル「リボンの騎士」。真ん中に容姿端麗な美少女が騎士の格好をし、頭に王冠

をかぶっている。背景はきらびやか。左下にウサギがいる。右下に第1章むかしむかしと書かれている。)

8 ページ

1 コマのみ

絵(雲がジグザグにあり、その上や周りに天使が乗ったり周りを飛んでいる。星に乗った一人の天使(おそらくチンク)がとても速い速度で飛び回っている)

ト書き「むかしむかし、広い雲空の雲の果てにチンクというオシャマでいたずらっ子の天使が住んでいました。チンクはいつも神々の頭痛のたねでした。」

9 ページ

1 コマのみ

絵(雲の中に神殿があって、その中で眼鏡をかけた神様がハートを乗せたスプーンを持っている。その右に女神さまが子供を抱いている。子どもたちが列をなして、途中までは行儀よく並んでいるが、真ん中のふたりは喧嘩をしている。その周りに天使がいる。何もしないで飛んでいる天使や、天使のわかかをもって楽しそうにしている天使、神様にハートを渡す仕事をしている天使、わかかを手に持って汗をふいている天使、子どもの喧嘩を仲裁する天使、紙を持っていてけんかしている子供に注意をしている天使がいる。ハートを隠すように持っている天使がいて、矢印でこれがチンクです。と書かれている。)

神様「さあさ、あした生まれる子どもたちや、ここへお並び。おまえたちはな、これから男の子か女の子かに決まるのじゃよ。青いハートをのんだ子はりりしい男の子に、赤いハートをのんだ子はやさしい女の子になれるわけじゃ。ほれ、アーンをおし…。」

女神様「はい、あなたは男の子になるのよ。いいわね。」

けんかをしている子供に注意をしている天使「いけないよ、けんかしちゃ。生まれるのを一年延ばしてしまうよっ。」

10 ページ

1 コマ目

絵(子どもたちが並んでいる。横を見ていたり、手をあげていたりしている。一番後ろの子どもにチンクが話しかけている。)

チンク「きみ、男の子になるんかい？」

一番後ろの子「どっちわかんないや」

2 コマ目

絵(雲の背景。後ろで別の女神さまがハーブをひいている。チンクがこどもにハートを勝手に食べさせている。子どもはびっくりしている。)

【作業の問題点】

コミックの言語化を行う中で一番困ったことは場面の変化をどのように伝えるかだ。コミックは字面ではなく、絵で場面の転換が行われる。さっきまでは A に焦点があげられていたのに、急に B に焦点が移ることがある。その変化をどのように伝えればいいのか絵を表現する中で工夫した。あと、名前もないようなモブキャストの発言を誰の発言とすればいいのか難しかったが、絵のままを表現することにした。例えば太った兵士であれば、太った兵士「 」と書いたりすることでイメージづくりのお手伝いができるのではないかと思った。書いている中で最初は絵のすべてをどうにか説明できないかと考えたが、やはりそこを文字で補いきるのは不可能で、大切なのはそこからイメージが膨らむかだと気づいた。そこから絵の表現をするときにこの表現でイメージが作れるかということ意識した。しかし、私は一度絵を見たうえで表現しているため、不足部に気づくのが大変だった。

不思議に思った部分としては対象となる漫画の需要についてだ。ターゲット層もわからないが、今の学生が見る漫画ではないのではないかと読んでいて感じた。私自身、漫画が好きで幼いころからよく読んでいる。最近では人気漫画がアニメ化したり、映画化したりしている。今回の言語化を行う中でアニメの副音声がどのようになっているのか気になった。アニメの副音声が充実だと盲や盲ろうの方も漫画を聞くということができないのではないかと思った。ドラマ化では漫画の良さが表現されにくいことがあるが、最近のアニメはかなり忠実に漫画を表現できていると思う。しかし、日本の副音声の技術は進んでいない気がするため、アニメに副音声が付く日はまだまだ先のことだろう。

「ドラえもん」「クレヨンしんちゃん」には副音声がついています。

コミックの言語化をやってみて、想像以上に難しく、時間がかかってしまった。今回は、「リボンの騎士」ならでは感じる難しさであると思ったことを報告する。

まずは、リボンの騎士の主人公「サファイアさま」は、王子（男）の姿を強いられて育った本当は女性、王女さまという設定である。また、リボンの騎士は、冤罪で捕まったプリンス・チャミング王子を助けた罪で牢獄に入れられたサファイアさまの変装である。第9章と第10章では、サファイア王子はサファイア王女であると判明しているため、最初から、サファイアさまが王子として振る舞っているときはサファイア王子、王女さまのお姿でいるときはサファイア王女として言語化した。しかし、頭に大きなリボンをつけた騎士がサファイアさまの変装であると分かるタイミングの言語化があり、私自身が幼少期に「リボンの騎士」を読んでいたため、初めて読んだ人はどの時点でサファイアさまであると気づくのだろうか、という点に悩んだ。そのため、森の中でリボンの騎士の変装を解き、サファイア王女のお姿になるコマまで、リボンの騎士とサファイアさまが別人であるような書き方をし

た。このように、視覚情報などで、のちのち同一人物だと分かるような設定や、ミステリーのように読者の主観で「怪しいな？」と思う描写があったとき、どのようにして主観を入れずに言語化しながらも、ワクワクしてもらえたらどうかと考えながら、言語化した。

また、「リボンの騎士」には、ファンタジーな出来事や見たことのないモノが多くでてくる。第9章、第10章で言えば、拷問部屋におかれたさまざまな道具、ヘル夫人の魔法、チンクがもっている光を放った十字架、チンクという天使のような存在などである。漫画は白黒で描かれているため、ヘル夫人の手のひらから出てきたビームのような魔法の描写を主観だけで炎ではないかと思った。しかし、これは私が今まで見てきたアニメや映画などが影響した主観であると思い、炎であるとは言い切らない選択を試してみた。表紙のサファイアさまが着ているドレスや、プラスチック王の前でバレリーナたちが踊っている場面なども難しかった。漫画のジャンルによって、言語化の難しさも変わってくるのではないかと思った。

最後に、自分が言語化してみた登場人物たちのうごきを別の人にやらせようと、全く思うようにならず、もどかしさや悔しさを感じながらも楽しいと思った。また、人はこういったうごきや風景から恐ろしいと感じたり、上品であることを表現したりするのか、と発見し、漫画は大袈裟に描写しているようで実はそうでもないかもしれない、と考えてみたりと、いろいろな学びがあった。今後、どのようなかたちでも、誰かに何かを伝える力は必要不可欠であると考え、こういった機会を通して、鍛えていきたいと思う。

その他バリアフリー教材

<https://self-advocacy.themedia.jp/>

1. 高山亨太先生の

「多文化ソーシャルワークの理解」「ろう者を対象にしたアセスメント」「盲ろう者への支援」「ギャローデット大学の歴史」

2. 皆川愛先生の

「ろう者学—障害学との棲み分け」「真の多様性とは—ろう文化論を振り返る」

3. 郷戸夏子先生の

「日本ライトハウスの設立者岩橋武夫（1898-1954）について」

4. 阿曾あゆみ先生の

「聴覚障害視覚障害に関する参考文献リスト」

5. 大野ロベルト先生の

「日本の伝承・文学・芸能における視覚・聴覚障害の位相」

6. 村下佳秀先生の

「CODA について」

7. 齊藤くるみ先生の

「英語字幕・英語点字つき、手話による日本の童話」

菊地美由紀先生と考える

コロナ禍の

視覚障害者&聴覚障害者

菊地美由紀氏：菊地美由紀です。3歳の終わりに小児がんで視力を失う。子育てをしながら東京光の家の職員として、利用者さんの就労・相談支援や、見えない暮らしの工夫などを伝える出前授業などの仕事をしている。



お嬢さんと絵本を読む菊地先生



ご夫君は本事業連携協議会の菊地委員

News 2 3 の Facebook より

菊地美由紀先生のセミナー（11月23日）

まず、視覚障害についてイントロダクション

弱視（ロービジョン）で、大学卒の社会人に、自分の子供時代を振り返ってもらいながら答えていただいたアンケートの抜粋です。1～3. の質問項目は以下の通りです。

<質問>

1. 病名とどんな見え方を教えてください。
2. 日常生活や学業・職業でどんなことに困り、どんな支援を必要としますか？あったらもっと便利なこと、悔しかった体験談などできるだけ詳しく教えてください。
3. 逆に、支援され過ぎて嫌な思いをしたことや、そこまでは支援は必要無いことなど具体的に教えてください。

<回答>

（参考例1） Aさんの場合

1. 病名とどんな見え方か

疾患名は、黄班部変性症（おうはんぶへんせいしょう）というもので、網膜の真ん中にある黄班という部分の病気です。私の場合、後天性で、小学校1年生のときに見つかって、小学校2年生の頃から見えにくくなりました。

見え方は、まず視力が弱視の中でもとても低いです。同じ病気の人でももっと高い人もたくさんいるのですが、私の場合は今は0.02～0.03くらいです。一般の視力検査の一番上のランドルト巻が1m～1.5mくらいでわかるくらいです。といってもわかりにくいと思うのでもっと具体的にお伝えします。

人がいることは2、30メートル離れていてもわかります。建物もわかります。大きなものはわかりますが、細かな文字を見るのがとても苦手です。ちょっと大学の勉強っぽい感じもしますが、目の中心が障害されているので、視力がとても低いです。周辺は見えるので、環境を捉えるのは比較的得意です。なので、歩行にはあまり困らないです。

視野については、黄班が障害されているため中心暗点です。目を向けようとする方向が見えません。決して真っ暗とかそういうわけではないのですが、私の場合、形容するのであれば、カラーの砂嵐のような感じです。目の真ん中が見えないので、目の周囲を使ってものを見ます。そのため、はたから見ると視線がずれていて、真剣に見ようとしているのによそ見をしているようにみられることもときどきあります。

光関係については、まぶしいのも暗いのも苦手です。本来私の病気はまぶしいのだけ苦手です。暗いのは得意というのが一般的らしいのですが、そうでもないというのが個人的な意見です。一応遮光レンズをもっていますが、見た目的に似合わない気がするので（笑）、夏場は日傘をさしたりしてしのいでいます。暗順応が苦手です。いきなり暗いところに行くと急に

見えなくなります。10分くらいたつとわりと問題なく歩けますが、それまでは普段と比べるとだいぶ見えません。

色についても、晴眼者と比較するとわかりにくい部分が多くあります。色は目の真ん中で感じるものなので、そのためです。私は、色の濃さが似ているとわかりにくいことがあります。例えば、濃い青と濃い緑や、薄いピンクと薄いグレーなど、どちらかわからないことが多くあります。

2. 日常生活や学業・職業でどんなことに困り、どんな支援が必要か。

(1) 学習面について

・文字：

普通の文字が見えないため、ルーペや拡大読書器を使って見えています。今は、補助具を活用すれば普通の文字を読むことはできますが、効率性を上げるために点字を主たる文字として使っています。

→大学ではご存知のとおりピアチューター制度を利用して、テキストデータ化や対面朗読、文献入手の補助などをお願いしています。今は支援をしていただいているので、問題なく学習ができています。

・悔しかった体験談：

私は小・中学校時代、主たる文字は普通文字でルーペを使って勉強していました。やはり友人と比べると読むスピードがかなり遅く、テストで明らかに全部解ければもっとよい点がとれるのに、全体の半分以上しか解くことができず、とても悔しかったです。特に中学校のときです。全部解いて私ぐらいの点の人もたくさんいましたが、それとはまた意味が違ふし、本当は私できるのに…、みたいな感じで、評価されないのが悲しかったです。

(2) 生活面について

・初めて行く場所の移動がしにくい：

慣れていない場所を移動することはとてもストレスフルです。いきなり階段があったり、きれいなガラス戸だと気づかずぶつかったりします。屋外だと、水たまりやくもの巣につっこむこともよくあります。特に弱視全般ですが、タイルの階段などはコントラストが低くとても苦手です。

→一緒に歩いてもらえるだけでもとても歩きやすくなります。また、階段にはコントラストの高い線をふちに引いてもらえるだけでも、大分歩きやすくなります。

悔しい？というか…の体験：

私は、目立ちたくないときには白杖を持たずに外出します。私はほとんど白杖をシンボリックな役割として使っているのですが、昼間であったり慣れた場所であったりすればなくてもだいたい問題なく歩けます（と思っています）。大学にいるときはアピールした方がいいのでだいたい持っていますが、遊びに行ったり買い物に行ったりするときは持たない方が多いかもしれません。それで、白杖を持っているときと持っていないときの周囲の反応が全然違います。

まあ当たり前なのですが、いい面も悪い面もあるかなと思います。白杖を持っていれば困ったとき頼みやすいですし、何かと気をかけてくれる人もいます。でも、白杖を持っているものすごくじろじろ見られたり、ちょっと引かれる感じというか、がすごくわかります。仕方ないのですが…。そして、白杖を持たずに目を近づけて商品とかを見ていると不審な目で見られたり、歩いていてちょっとぶつかりそうになったりすると舌打ちされたりすることもあります。ぱっと目で弱視というのがわからないので、これはこれで結構困ります。「これいくらですか？」と定員さんに聞いても、ここに書いてあるでしょ、とか、指をさされるだけとか、そういうことがあります。なのでそういうときには、「弱視で目が不自由なので、教えてくださいませんか？」みたいな感じでお願いします。なかなか難しい問題なのですが…、これは仕方ないです。自分から言うのが一番かなと感じています。

3. 支援され過ぎて嫌な思いをしたこと

・いつか覚えていませんが、お菓子をもらったときにわざわざあげてくれたりとか、結構ある気がします。自分の手元のことは自分でできるので、渡してもらっただけで大丈夫です。ぱっと思いつくのが他にないのですが、すみません…。

<他の方のことについて>

・本当に弱視はバラエィーにとんでいて、一人一人見え方が違います。私と逆で視野狭窄の人は、視力が高く文字を読むのは得意ですが、視野が狭い分歩行がとても苦手です。夜盲もあることが多いので、明るい場所ではすたすた問題なく歩いているのに、暗い場所では全く見えなくなるという人もいます。また逆に、全色盲という状態の人は、暗いところだともものすごく見えるのに、明るいところではかなり見えなくなります。なので、サングラスをしていることが多いです。

(参考例2) Bさんの場合

1. 病名とどんな見え方か

- ・先天性緑内障と後天性の白内障
- ・視力は右 0.01、左 0、視野は 30~40 度程度。
- ・暗いところはさらに見えづらい(夜盲ではなく、視野が狭いことで光が入りにくくなるため)

2. 日常生活や学業・職業でどんなことに困り、どんな支援が必要か。

- ・主に点字を使用しているため、教科書等は基本的に点字あるいはデータで提供してほしい。
- ・データ化が難しいもの、図などについては、自身で拡大読書器を用いて確認(ルーペや拡大コピーでは紙の白色がまぶしく感じ、また液晶画面の方が見やすかったため)
- ・しかし自分で見て確認するのは時間がかかり目も疲れやすいことから、分量が多い場合には対面朗読を利用したり、資料のちょっとした図などは友人に説明してもらう。
- ・日常生活(買い物場面)では、商品や値札の表示が大きい場合には自身で見えて選ぶことができるが、目的の売り場までたどり着くのが難しいため店員に聞いて連れて行っても

らうことがある（「見る」ことはできても「探す」ことが難しい）。

→看板や売り場の表示など、表示する位置を統一しているアーケードや大型スーパーなどは目的の売り場を探しやすい。

3. 支援され過ぎて嫌な思いをしたこと

上記でも書いたように、拡大コピーしても拡大読書器を通さないと見えないので、拡大の資料は私の場合には必要なかった。

（参考例3） Cさんの場合

1. 病名とどんな見え方か

（1）先天性白内障

（2）続発性緑内障

白内障のために水晶体は除去しています。眼内レンズは入れていません。

視力は、左が0.04程度、周辺視野欠損あり。右は光覚です。

晴天時やテレビをみる時などは、まぶしさが厳しいので、遮光レンズとブルーライトカットレンズの特性を持ったコーティングの眼鏡（度数6d）を常用し、外出時はその上に濃い色の遮光オーバークラスを重ね、まぶしさ対策をしています。

拡大読書器を使えば新聞や小説などの文字も読めますし、眼鏡をかければテレビのテロップなども読めます。

2. 日常生活や学業・職業でどんなことに困り、どんな支援が必要か。

視野が狭い、焦点距離が短いという事をあまり理解してもらえず、「そこ」、「あっち」、「みればわかるでしょ」と言うことをよく言われます。（だいたいが家族に）。

3. 支援され過ぎて嫌な思いをしたこと

ロービジョンの人には拡大文字というイメージが強いためか、僕の視力にはマッチしないポイントで印刷された紙媒体の資料を渡されることが何度かあります。ポータブル型の拡大読書器を使う上では、あまりサイズが大きすぎると画面に入りきらないため、通常のサイズで配布された方が助かる場合もあります。

根本的に、僕は点字が使えるので点訳した資料や、あるいはパソコンで読めるテキスト形式のデータで渡してもらった方が扱いやすいなあという体験を何度かしました。

（参考例4） Dさんの場合

1. 病名とどんな見え方か

・病名：網膜色素変性症

・見え方：視力は強制して両眼0.3、強度の視野狭窄(5度)、夜盲、色弱

*視力はそれなりにあるので文字の読み書きには大きな支障はありませんでした。

2. 日常生活や学業・職業でどんなことに困り、どんな支援が必要か。

- ・例えば節電対策や教室の壁の色でまぶしすぎたことなど。
- ・先生が黒板に白いチョークで書いたものは読み取ることが出来ましたが、赤や青で書いたものは少し読み取りにくく感じました。また、白と黄色の区別がつかず、前に出て問題を解く際に黄色いチョークで書いてしまうことがありました。
- ・横書きの文章を読むことは特に問題なかったのですが、国語の教科書のような縦書きのものを読むのは困難でした(上下の視野の方が狭かったからだと思います)。
- ・視野狭窄や夜盲があるので工場見学やプラネタリウム、修学旅行といった学外での活動(特に夜や暗い施設)には不安が大きかったです。
- ・体育や球技大会では球を追えないので参加できず疎外感を感じました。
- ・全校集会や運動会での入場行進など、前の人と一定の間隔を空けて歩かなければいけない場面でうまく間隔がつかめずぶつかってしまったり、逆に間隔を空けすぎてしまうことがありました。

3. 支援され過ぎて嫌な思いをしたこと

- ・クラスで席替えをする際に目が悪いからと教卓の前に座らされましたが、黒板に近すぎて視野に入りきらなかったり先生が目の前に立っているの逆に見えないことがありました。
- ・プリントやテストを超拡大にして提供されましたが、文字が大きすぎて目が疲れてしまうことがありました。また、ただ拡大コピーをしたものだったのでA3用紙を2枚くっつけたようなとても大きな紙で、机の上に広げてもはみ出してしまい文字を視野に入れることが困難でした。

保護者

2014年10月の終わりに、当事者が集まる盲学校主催のワークショップの保護者懇談会に参加した時のこと。以下のような保護者からの悩みをたくさん聞きました。一部抜粋します。皆さんはどう受け止めますか？どんな支援や連携が必要だと思いますか？

Aさんの場合

A県在住、小5の娘(弱視)を持つ母からの相談

娘は地域の学校に通っていて通常の学級で学んでいる。視力は0.06、単眼鏡を使って黒板の文字をなんとか見ることができているが、一番前の席に座れるよう配慮してもらっている。

5年生になった今、家庭科など個別の支援が必要となり、支援員が付くようになった。なんでもやらせてほしいと思いきや、その支援員が過度に怖がって、「包丁は使っちゃだめ」、「よく見えないからってガスバーナーに顔近づけちゃだめ」などいろいろな制限をかけてくる。付添と話を理解を求めようとしたが、不仲になってきてしまい、学校側から「担任を通して話をしてほしい」と言われてしまった。

娘は娘で、心が敏感な時期でもある。周囲の友達から「何であなただけに支援員なんて付くの？ずるい」と言われている。何かゆっくり話そうとしても「見えなくなったことのない

お母さんには気持ちなんてわからないよ！」と跳ね除けられる。

性格は引っ込み思案で積極的に尋ねたり参加したりするのは苦手。じゃがいもを切らせようとしても、半分にすることができない。半分にしたらは平らな面ができるからか切れるようになる。

こんな状況で、娘は大丈夫なのでしょう。もっと情報がほしい。視覚障害を持つみんなが集まるキャンプに参加した時は、娘は他の子を手引きしてあげられていて役に立てたと自信を持てたようだった。もっとそんな場に行きたいが、情報が無い。今後将来、娘はどうやって生きていけるでしょう。冷蔵庫の中身も、野菜が腐ってるのかどうかとか、黴が生えているのかとか、自分でわからないみたいですし・・・。

(半分泣きそうになりながら訴えていた)

Bさんの場合

B県の盲学校に通う高2の娘を持つ母からの相談。

弱視の娘が白杖を恥ずかしがって持ちたがらない。危なくて見てもらえない。どうしたら良いか。

Cさんの場合

地域の中学校に通う2年生の娘を持つ母からの相談。

弱視の娘は、特別支援学級で、他の病弱児と共に学んでいる。通常のカリキュラム。

娘の悩みは、一緒に学ぶクラスメイトとゆったり勉強することは楽しいようだが、テストの時期になると不公平さを感じるとのこと。通常カリキュラムでやっている弱視の自分は、通常のクラスの子たちと同じ内容・両のテストを解かなくてはならない。一方で、いつも一緒に学ぶ病弱児の仲間はテストの量が少ない。自分だけテストを受けている間に、病弱の子たちはプールに入ったりしていた。ずるいとのこと。

いよいよ進路のことも考えなくてはならない時期になってきた。通常のクラスの同学年の子たちは高校の見学に行ったりし始めたが、うちの子は一緒に行けない。背中を押しても娘自身モチベーションが無い。「自分だけ道が見つからない」ともやもやしている。外の進路を考えられない。このままずっと中にいたいという気持ちのようだ。親としてどうしたらよいか。

Dさんの場合

盲学校に通っている小6の息子(全盲)が、白杖を使って単独で帰省ルートを覚え始めた。歩行訓練士の資格を持つ先生と、母親である私が後ろから付いて見守っている。けれど、自転車がどんどん走ってきたり、人にぶつかられてばかりで、心配でたまらない。このまま見守り無しで息子を一人で歩かせることはできない。どうしたらよいか。

その他

・盲学校は県に一つ(広い所では2・3校ある所もあるが)しか無いので、寄宿舎に入れるのが辛い。

・送り迎えが大変だ。

- ・東京の盲学校を受験したいが、娘を手放す訳にはいかない。夫は地元に残ってもらって、娘が合格した暁には母である私も一緒に付いて行き、東京で二人暮らしをしようと思う。
- ・弱視学級をなかなか作ってもらえない。学習障害の子供たちと勉強させられるため、勉強がなかなか進まず困っている。
- ・私の子供は盲学校に通うが、勉強よりも電車に乗ることやピアノを弾くことが大好きで、ちっとも勉強してくれない。このままでいいのか。
- ・地域の学校に通うが、宿泊学習など行事の際は、必ず親の付き添いが求められる。子供は嫌がっているが、どうにかしてあげられないか。

視覚障害当事者のコロナ感染・自宅療養体験記

(職場での社内報掲載記事より)

先日、視覚障害を持つ当事者である友人が、新型コロナウイルスに感染しました。地域で暮らす視覚障害当事者で福祉施設の利用をされていない身近な人が感染したケースは私にとって初めてだったので、その方にも許可をいただき、どんな風乗り越えたかをこの場をお借りし、シェアさせていただきたいと思います。

その方は十分予防対策をしていたようですが、ある日突然喉の違和感を感じ念のため仕事はお休みしたそうです。その休んだ日に急に三十九度の熱が出て病院へ行くも最初は「ただの風邪だろう」と診断されたとのこと。念のため自らPCR検査をさせてほしいことを訴え、結果陽性と診断されたそうです。

味覚・嗅覚異常、脈は百を過ぎ激しい倦怠感を感じていたものの熱はすぐに下がったことで、軽症者扱いであったその方は入院はできず、ホテルか自宅で療養することを求められました。

さて、この場合、慣れた自宅が良いのか、療養のために整えられた設備のあるホテルが望ましいのか、どう考えるべきなのでしょう。まず一人暮らしでの自宅では急変した時にどうすれば良いのか困ってしまうこと、食料の買い出しも禁止されていること、血中酸素飽和度測定器を貸し出しされても自力では見えないことなどから不安を感じたそうです。一方、ホテルでは盲導犬を誰かに預けてこない限り利用できませんと断られ、飲食や洗濯機が利用できるものの、全てセルフサービス。その上デリバリーやウーバーイーツのような出前も宅配も受け取り禁止、ホテルの電子レンジも自販機も使ってはならない制限が設けられているのだそうです。そんな状況では困り果ててしまうだろうことは目に見えています。どうか自宅で療養できないかと交渉を続けました。

その結果、訪問看護を利用できることとなり、毎日バイタルを測りに来ていただくことができることとなりました。また、自治体から地域のお弁当屋さんに依頼し、家の前まで冷凍のお弁当三食を運んでいただけることとなり、そのお弁当についての説明は電話で教えていただけることとなりました。盲導犬の散歩やトイレのお世話は結局倦怠感と外出禁止のために断念。たまたま近所の方が預かってくれることとなり、本当に救われたと話してくれました。

陽性者となつてからは取りきれない程の関連部署から電話がかかってくる、もしもの時の連絡先を大量に告げられたそうです。また、保健所からは行動履歴調査があり、二週間以内に会った人たちの名前と電話番号を聞かれます。点字でメモを取れる体制、あるいは音声で録音できるICレコーダーを準備しておくことの大切さを身に染みて感じたそうです。また、日ごろ健康そのもので主治医がいなかったことで、訪問看護指示書を書いてくれる医師を見つけるまでにも時間がかかったことから、日ごろから医師と繋がりを作るために顔

なじみの病院があることの大切さを話してくれました。更に、今回どうして菌をもらってしまったのかと考えた時、見えない当事者からは安易にマスクをしていない人に近づいてしまうことを回避できないため、そういったリスクと常に隣り合わせであることを痛感したとも話してくれました。幸いにもその方がマスクをして会っていた方たちの中には陽性者は出なかったそうです。

なお、考え方や使えるサービスは自治体によって異なります。特に視覚障害を持っていると尚更、いつでも異例のケースとして判断され、たらい回しになったり、指示に時間がかかることが多々あります。ヘルパーさんの支援も受けられなくなってしまった時一体どうなるのか。まだまだわからないことだらけです。我が家ももしもの時には子供を児童養護施設のショートステイで預かってくれるのかなど、いろいろ話し合いを始めています。いざとなったらという時の話をイメトレするため、誰かとまずは気になることを話し合ってみる。そして専門家に尋ねて情報収集しておく。「念には念を」の準備を備えておくことに越したことはないのかもしれない。

以上

コロナ禍における視覚障害当事者の生活

～ 施設職員として・母親として～

(東京多摩『いのちの電話』 広報委員からのインタビュー原稿より)

東京光の家 “元気で安心して過ごせるように”

コロナ禍、三密を避けマスクをつけることが当たり前になった生活の中で、障害のある方はどのように過ごしているのか、視覚障害者のための総合福祉施設「東京光の家」を訪ね、自らも視覚障害を抱えながら職員として支援員を務めている菊地美由紀さんに、皆さんの様子の変化や支援の際に心掛けていることなどをお話ししていただきました。

“東京光の家”（東京都日野市）は大正 8 年（1919 年）に「盲人基督信仰会」として設立され、昭和 8 年に「東京光の家」と改称。救護、訓練、就労支援の通所施設とグループホームなどの入居施設がある。利用者は通所の方も含め 200 名以上。一般開放のレストランを併設し、地域の人々との交流をはかりながら、100 年以上に渡り多摩地区の福祉拠点となっている。

〈コロナが流行り始めた頃〉

コロナから『命を守る』ため、光の家では様々な取り組みをしました。まず、公共機関で通われている方には送迎車を出し、密を避けるため食堂の会場を入所者向けと通所者向けの二つに分けました。また、皆さんに安心していただけるように、施設長が「今後の変化」について丁寧に説明をしました。この時、言葉での理解が難しい方にも不安を軽減していただくため、保護者の方とも密に連絡を取り、皆さんに「大丈夫なんだね」と安心してもらえるよう心掛けました。

第一回緊急事態宣言で通所を控えていただいた時は、朝晩電話をして体温を聞いて様子を尋ね、話の内容や声のトーンから伝わってきたその方の様子を Excel シートの個別の記録に書き込み、他の職員と連携を図って状況把握を続けました。

〈支援を続ける中で〉

私たち職員が心掛けているのは、皆さんが元気で安心して過ごせるような『居場所』作りです。消毒と予防対策に気を配りながら、生きがいを持って働ける場、そして楽しみを感じられる生活の場を維持できるよう努めています。また、自閉症の方など日課が決まっていないと何をしてよいか分からずに不安になってしまうこともあるので、日常生活のリズムを大事にしています。例えば季節ごとのお楽しみの行事など、中止はせずに、内部だけで密を避け、形を変えて行います。それでも地域の方に日頃の感謝の気持ちを伝える場も大切であるため、バザーだけは外部と内部に分けて行いました。

ある日の一場面ですが、陽性者が出た疑いがあり、急に一斉解散になった時も、先ず「大丈夫ですよ」と声掛けをし、落ち着いて行動できるよう言葉を選びながら情報を伝えました。

この時、家に帰ってからのお昼ご飯があるかどうかを確認します。無ければ購入をするよう助言したり、保護者やグループホームに連絡を取ったり、可能ならば職員が付き添って買い物をするなどして、帰ってから困らないようにするためです。

更に、出入りのあるボランティアさんや通所者、外泊からの帰園者には抗原検査をし、理事長の取り計らいでワクチン接種も職員・利用者が早めに終わらせることを実現できました。

施設には全盲ろう者の方もいらっしゃいます。盲ろう者の支援も私の大切な仕事の一つです。盲ろう者は私達以上に指で触れ合って情報交換をします。「密接」を遮断したら生活ができない「触る文化」です。そのため、密集と密閉のみ回避する形で『二密』を避けるようにしています。

消毒は皆さんしっかり意識してやっています。私もケアの仕事なので消毒は欠かせません。ワンケア、ワンプッシュ！一人を支援した後は必ず手指消毒を行うルールの合言葉です。絶対にコロナに感染しないために建物や作業場の机周辺を念入りに1日3回塩素消毒をしながらクラスターを出さずにここまでやってこられました！

今は外出制限をしているので、ストレスが溜まります。それでも、身だしなみに気を使うことも意識し続けてもらえるよう、訪問型理髪店に施設まで来ていただいたり、気分転換のために小グループで買い物を計画したり運動したり読書の時間を作ったりしながら過ごしています。

皆さんが元気で安心できる『居場所』があるのはとても大事ですね。

〈生活する中で困った事〉

ソーシャルディスタンスで人の存在を“感じ取る”のが難しくなりました。距離感があるのに音が聞こえにくく、気配も感じにくくなったように思います。

バスに乗るのに列を作って並んでいる時など、今まではほんのちょっとした足音や細やかな服の擦れる音などを目の前の気配として感じ取りながら前の方に付いていくように動きましたが、今はまったく感じ取れなくなりました。

更に、マスクをしている事で空気の流れが遮断され、音がこもったように感じられます。私達は、自分の周りの気配や空気の流れを感じ取りながら歩くので、顔の感覚はとても大事です。マスクでカバーされて音が曇ってしまい、感じ取りにくいのだらうと思います。以前に大きな手術をした後に、切ったあたりの細胞が死んでしまったようでしばらく気配が感じ取れなくなったことを思い出しました。「肌で感じている情報」の多さに今回改めて気付きました。

人との行き来が自由にできないと、人との繋がりが無くなって情報交換ができません。第一回緊急事態宣言の時は、同行援護ヘルパーの感染防止のために、同行を依頼しても事務所から断られることが増えて外出の幅が狭まりました。ヘルパー無しで一人で出かける事が増えましたが、出先の施設のエレベーターのボタンの上に抗菌シートが貼ってあって点字が読めずに行先ボタンを押せなくなったり、消毒液の設置場所が分からずに困ったりしま

した。こういうことは事前に気が付いてもらえるといいのですが、まだまだ理解が進んでいないのだとあきらめながら過ごしました。

それから、電車の手すりやつり革など、誰が触れたか分からず不安で手袋を用意しました。頻繁な消毒のせいで手が荒れて指先の感覚が変わりました。点字の読み心地やパソコンを打つ時の手の感じが変わってきています。

〈良い面での変化について〉

オンラインが当たり前になったことは、外出が簡単ではない私たちにとってはすごく助かります。一人で知らないところに出かけたり、イベントなど誰かと一緒に行かなくては参加しにくい時など、オンラインならすぐに繋がって情報交換ができることが本当に助かります。

私は市内小中学校等で「見えない暮らし」の理解を深めるための福祉授業に携わっています。訪問が難しくなった今でも、子供たちや大学生たちとオンラインで繋がれる、本当にありがたいですね。

それから、第一回緊急事態宣言の時はみんながテレワークで家にこもって、外を歩く人が少なくなったため、道が広くなって、自転車を飛ばしてくる人もなく別世界のようにスイスイと歩けました。

市役所などヘルパー無しで一人で行ってもきちんと対応して下さり、一人でできることが増えたので、これも良いことのひとつです。

〈個人的には〉

障害に関係なく今のコロナ禍の状況では誰もが自由には会えませんね。

私も母親として、市が開催する乳幼児検診が延期され、子どもが入院した時には面会も制限され、心配は募る一方でした。母に頼りたいと思う時でも、高齢のうえ他県に住んでいるので感染が心配で頼めません。母も孫に会いたい気持ちを抑えて凌いでくれているため、時折テレビ電話でコミュニケーションを図っています。

また、保育園では行事が潰れて季節感もなく、子どもの成長がわかる発表会もなく、保護者会もない一年でした。皆で集まろうと思って作られた Line グループも殆ど活用できずに眠っています。

私たちは夫婦で全盲なので、災害時などに備えて地域の民生委員さんと連絡が取れるようにして頂きましたが、コロナ禍で委員さんとは会えずにいます。今は定期的に訪問して下さる保健師さんとの繋がりや、ファミリーサポート、ヘルパーさんたちとの御縁を大事にしています。

一人一人ができることで支え合い、誰一人取り残さない社会を目指していきたいですね。

〈インタビューを終えて〉

お話をしてくださった菊地さんは幼少期に小児癌により失明されたそうです。視覚障害を持つ仲間の役に立てる仕事に就きたいと考え、東京女子大学で中高英語教育の教員免許

を取得。その後は米国テキサス州にて一年間、見えない・見えにくい子供たちに授業をするティーチングアシスタントとしてのインターンを経験。筑波大学大学院人間総合科学研究課障害科学専攻博士前期課程を修了した後、現職である社会福祉法人東京光の家へ入職し10年が経ちました。就労・相談支援業務に従事するかたわら、市内小中学校等を中心に「見えない暮らし」の理解を深めるため、多くの出前授業に携わっています。また、三歳のお子さんのお母さんでもあります。勤務と子育ての合間を縫って、つい最近は、日本社会事業大学の通信教育課程の社会福祉士養成課程を終了されました。

日々の生活を通して施設の皆さんが元気で安心して過ごせるよう工夫をされ、"居場所作り"を大切にしているご様子に心あたたまる思いを感じた訪問でした。

以上

コロナ禍と聴覚障害者

【菊地美由紀先生のお話に対して聴覚障害者たちが語る】

新型コロナに罹ったろう者の友人から聞いた話です。コロナ陽性であることが判明した時、保健所からや電話がかかっきて、自宅待機やホテル療養などの指示をされますが、電話が出来ない友人はどうすれば良いのか分からなく、困ったようです。また、電話リレーサービスを使って保健所に電話しても本人でないと言われ、対応してくれなかったそうです。コロナに関する相談窓口への電話連絡の場合もそうだったようです。

ホテル療養になった時、重要なお知らせが館内放送で流れても分からない。

日本手話も会話の内容を理解するために口型を見る必要があるのですが、コロナ禍で公共の場や大勢の人がいるところでは、マスクを外すわけにもいかず、コミュニケーションが取りにくいと感じています。

気軽にコンビニやスーパーに立ち寄れなくなりました。セルフレジがないところでは、店員に「大声で言ってもらっても分からないんです。筆談をお願いします。すみません」といってもお願いしないといけないことに多少ストレスを感じています。

難聴の友人によると、マスクのせいで口形が見えないのが一番困るとおっしゃっていました。僕の場合は口形ではなく非手指動作の一部が見えないのが特に困りました。「ぱびゅべぽ」手話に関しては口形と非手指動作（眉上げなど）の二つが重要ですので、もう一回お願いしますとお願いすることが時折あります。

普段どのようなコミュニケーション方法を使っているかにもよりますが、私の場合、音声と口形がメインなので、マスクによって

- ・声が小さくなる
- ・口形がみえなくなる

が一番困ります。

また、窓口などはアクリル板があるのでさらに聞き取りづらくなります。

密を避けるためにできるだけ距離をとるように言われますが、これもやはり声が届きにくくなるので厄介です。

聴覚障害者と言っても人それぞれですが、私はマスクによって口形が読み取れないこと（スーパーなどで袋要りますか？などがわからない）、Zoomで手話通訳が上手く読み取れないことがあります。

困ることですぐに思い浮かぶのは、マスクをしていて口の形、表情が読み取れず、聴者は勿論、聴覚障害者同士でも会話が不自由な点、また話しかけられていることに気づきづらい。

困っているのは

・内科で筆談したがるらない、断られることが多くなったことです(多分感染拡大防止のため?)

・ろう学校で授業中生徒と先生、口話でやり取りすることが多いのですが、補聴器つけない子や日本手話話者は今喋っていることに気付かないまま、得られる情報が少なくなっていることです。(コロナ禍になる前は口動かしているところをみて今喋っている、とわかるので、すぐに何話したの?と聞いていました)あくまでも自分の場合です。

人工内耳の友人は、マスクで口を読めず、困っていると仰ってました。ちなみに私は音声日本語を使わないので、困っていません。

聴覚障害者といってもいろいろなタイプ(補聴器、口話、手話など)がいるので、困り事も違ってくるかなと思います!

マスクで店員や駅員が喋っていることが読み取れないので時間が大幅にかかってしまう。

Zoomなど映像のものになると手話通訳が小さく見えることと、手話を見逃さないために画面をずっと凝視しなければいけないし集中力が続かないため、情報の見落としがある。集中できたとしても目が非常に疲れてしまう。

姉にも聞いてみました。マスクで表情が読み取れない→雰囲気がわからない。今忙しいのか、話しかけて良い時なのか、話しかけるタイミングがわからない。聴こえる人は目の表情が豊かではないので、目だけを頼りに表情は読み取りにくい。話さないで昼食を摂るなど、話す機会が減った。→どんな人かわからない。ちょっとしたら会話やお昼休みにその人となりがわかるはずだが、コロナ禍では機会がなく、わからない。

今までしてこなかったオンラインによるものがふえた。対面ならたとえ通訳がいなくても、その都度知らない単語については質問ができる。パワポを使ってのzoomだとわからない単語を他の方が質問しても答えるのは音声なので、結局、情報の共有はできなく、わからないままになってしまっている。

「目に見えない世界を生きる」の中には、大学生活についても書かれてあり、自分の大学生活を振り返ってみた。情報保障の見方や積極的にサークル活動に参加する面では共通点を感じた。点字サークルもあることを知った。点字に興味あるが、点字は大人になってから覚えることは難しいという話を聞き、より挑戦してみたい気持ちになった。

声で話をする場合、マスクをしているので、顔の動きが読みにくいことと、口の形が読み

取れないので、耳（人工内耳）に頼る必要があるため、とてもつかれやすくなる。声で話しをするときは情報源が減ってしまうのでコロナ前に比べて集中しなければならない。手話の場合は表情が読み取りにくくなったことが一番痛い。同じ単語でも意味が違う手話があるので、文脈や口の動きで区別するので、その区別がつきにくくなったと思う。どちらにしても、初対面の方と話をすることは、できなくはないが、ちょっと頑張らないとという状況にはなった。慣れている人であれば、推測ができるが。

点字の読み書きができる視覚障害者は約 10%と言われており、視覚障害者に対して様々なサービスを提供しているサピエ図書館では音声（録音）図書の製作などが行われていることを知った。聴覚障害者の中でも日本語の読み書きが出来ない人が多くいるが、手話で読む本のようなものをあまり見かけない。確かに、視覚障害者はマヨネーズやケチャップ、ポッキーやトッポなど形が同じのものを区別することが困難であるなど苦労することが多い。しかし、日本語の読み書きが出来なくて大変な思いをしている聴覚障害者も多くいるので、どっちが大変なのか、比較するのではなく誰もが暮らしやすい社会づくりのためにより多くのサービスを提供できるようにしていかなければならないと感じた。

①「点字離れ」

近年点字離れが進行していると言われていいる。その理由をいくつかを挙げてみると、点字触読の難しさから、習得が困難な中途失明者が増加していること。平成 18 年度身体障害児・者実態調査の結果によると、視覚障害者数は約 32 万人である。そのうち、点字ができる人は約 4.2 万人（13%）、点字ができない人は約 23 万人（71%）。点字ができない 23 万人のうち、「点字は必要なし」：19.5 万人（61%）、「点字が必要」：2.1 万人（7%）であると明らかにした。広瀬が指摘したように、パソコンの普及により点字を覚えなくても学習活動や社会活動に大きな不便を感じない等あるとも考えられる。

②「ろう者と音楽」

私は、重度感音性難聴で、人の声も音も全くない世界に生まれてきた。高校までは補聴器をつけていた。補聴器だけでは、すべての音を聞き取ることはできない。補聴器をしていれば聴こえているのだと勘違いされてしまうのも難しい問題である。

ろう者（聴覚障害者）の中には音楽が苦手な人が多く、私もその一人である。しかし、ろう者でも音楽を聴くことが好きな人もいる。耳が聴こえないのに音楽なんてわかるの？と不思議に思う人もいるだろう。音楽には、あらゆる方法で人の心を揺り動かす力がある。音は聴こえなくてもリズムを身体で感じ、聴者と同じように音楽を楽しむことができる。例えば、映画やテレビの生放送やCMなど、すべての映像に字幕がつけば、ろう者も聴者も一緒に情報を得たり、楽しむ。しかしそういう配慮はなかなか普及しない。ろう者は見た目では困っていることが分かりにくいのでなおさらである。法的に差別や偏見を禁止したところで、偏見はなくなる。障害者は社会的弱者であり、非障害者の理解や配慮なくして生きていくことはできない。そのような考え方を今まで以上に多くの方に理解してもら

ような社会を構築していくことが必要だと考える。一方、ろう者が視覚的・聴覚的のほかどのような方法で音楽を聴くかを調べてみると、テクノロジーを活用した聴覚支援システムによって、耳が聴こえる・聴こえないに関わらず、音楽を楽しめることがあるとわかった。

- ①ヘアピンのように髪に装着する「オンテナ」
- ②抱きかかえて使用する球体形「サウンドハグ」
- ③着ることで音楽を全身で体感できる「オーケストラジャケット」

【支援者の意見】

目が見えない方にとって、触れることは重要な役割があるだろうが、コロナ禍の今、触れるということはできるだけ避けられるようになっている。先日訪れた回転寿司のタッチパネルは触れなくても操作できるようになっていた。タッチパネルに限らず、様々な物に触れなくてもよいように社会が変わっていく可能性が高い。

社会福祉法人日本点字図書館による平成 25 年 10 月の、日本点字図書館の利用者を対象にした調査によって点字の必要性がわかっている。

・録音図書はニュースのような速報性のあるもの、雑誌のような雑学的、娯楽的な情報へのニーズが高い。これらは、広く浅い情報であり、情報量も多い。

・一方、学習や調べ物ものなどの、正確性を求められるもの、しっかり覚えたいものは回答者の 8~9 割の人が点字を利用している。

・普段どのような場合に点字を使用しているかと尋ねると、「物の識別 (CD、容器、薬、本、衣類、冷凍食品、衣類の色・柄、郵便物など)」と回答した人が回答者の 51%を占めており、同じような物を識別するのに点字がいかに便利なのかかわかる。

社会福祉法人日本点字図書館、「点字利用と読書に関するアンケート調査の結果について」、https://www.nittento.or.jp/news/tenji_enquete.html

先生のお話から、今は録音ラベルという便利な物ができていることを知った。どうしても、便利なツールがたくさん出てくることが視覚障害者のためなのではないかという考え方をしてしまうのだが、「自分で読む」ことができる点字を学ぶ機会を奪うことに繋がっていないかという点まで考えなければならぬことに気付かされた。上記の調査でも、「正確性を求められるもの、しっかり覚えたいもの」は多くの人が点字を好んで利用している。

テクノロジーの発展によって、話した言葉がほぼ同時に文字で起こされるものも開発されてきている。聞こえる人が勝手に、「手話は不必要だ」と考えることに繋がらないように注意しなければならない。

私は点字ユーザーの減少について調べた。国の調べでは 10%程度、全体の 1 割程度の人が

点字を読めるとしている。この1割程度だけを見ると点字がどれほど有効なものなのかははっきりとはわからない。しかし調べていく中で、視覚障害者には中途障害者が多いことがわかり、このような調査の全体の1割程度という数字だけを見て点字の必要性について考えるのは良くないと気づいた。世の中が便利になることで、もとある本来のツールがなくなることが無いようにしなければならない。そして点字の必要性について私たち見える人々も理解しなければならない。私は高校の授業の中で点字を自分で打ったことがある。自分で打つ時に初めて気づいたが、打つときは紙を裏返して打つことになるため全部反対から打たなければならない。とても難しかった記憶がある。私たちが点字を覚えることは簡単ではないが、点字を必要としている人々のために何かもっとできることがあるのではないかと思うので、私はまた点字に関心を持つことから始めようと思う。

私は視覚障害者の方が用いるパソコンが気になって調べた。視覚障害の方のパソコン教室があったので、そのサイトを開いたところ、文字の大きさや色が配慮されていた。特別なパソコンを用いていると思っていたのだが、普通のパソコンにアプリをダウンロードして使用していることが分かった。スマートフォンの設定にも様々なものがある。私はiPhoneを用いているが、取扱説明書を熟読したことがなかったため、全く分からなかった。字のサイズ変更や読み上げ機能のほかにも、色の反転や細かい色の設定もできるのだ。誰かに教えてもらいながら自分に合った設定にしていくのだろう。また、パソコンを用いた仕事も、YouTubeに投稿している方がいた。どのようにパソコンを用いているかも見ることができた。

現代の視覚障害者はスマホや音声での読み上げ機能を使いこなし、日常生活を送っているため生活の中で困難を感じることは少なくなっているのだろう。画像や写真の文字を読み上げる機能もあるようです。視覚障害や点字について調べた際、信頼のおける人物に手伝ってもらったことで、物（色や種類）の判別を行う必要があるとわかった。例えば、缶の飲み物には「お酒」という点字があるがそれ以外の区別はつかない。現在の点字の記載だけでも十分でないのに、点字がわからない人が増えることが更なる困難につながっていくのではないかと感じた。

ラジオの放送局の中には日本で唯一視覚障害者向けのラジオ放送があるようです。運営は、社会福祉法人視覚障害者文化振興協会が行っている。受信するためにはアンテナ工事や毎月の利用料がかかってしまうが、社会福祉法人がする取り組みとして目新しいと思った。テレビのようにすべての人向けの中で視覚障害を持つ方向けの取組をするのとまた別の発想であり、一般的なラジオ局の工夫についても知りたいと思った。FMとAMでFMが情報向けとは言われているが、テレビのように人も内容もあまり変化のないメディアの活用方法もっと考えたい。

「視覚障害者によるコンピュータ利用の歴史」についての論文について少し調べた。視覚障害者によるコンピュータ利用の最初は、1950年代後半、今の筑波大学の大学院生だった全盲の尾関育三さんが、英数カナ文字から点字への変換アルゴリズムを開発して、当時の日本電信電話公社の通信研究所で開発されていた計算機に実装された。それがおそらく視覚障害者向けのコンピュータ開発の最初ではないかと言われている。その後は1970年代前半になると、色々なところでコンピュータによる点字の打ち出しが行われていった。他にも、筑波大学付属の盲学校の教員だった長谷川貞夫さんは、ミニコンピュータを使って自動代筆システムの研究を行っていた。これは、視覚障害者が自力で漢字カナ交じり文を書くための研究であった。尾関育三さんは、昭和26年に東京教育大学に入学し、その年に国立大学で初めて点字受験が認められた。これらを調べてみて、視覚障害者のコンピュータ利用の歴史は比較的新しいものであると分かった。より多くの視覚障害者の方々が、多様な情報保障を受けられるためにはどのような支援が必要なのか、今後も考え続けていく必要があると感じた。

文部科学省と国立特別支援教育総合研究所の文献には、現在、インクルーシブ教育が推進されている影響で、特別支援学校よりも、特別支援学級や普通級を選ぶ視覚障害児が多いことが書かれていました。普通学校に在籍している視覚障害児の課題として挙げられているのは、「板書されたものをノートテイクすることが難しい」「課題が時間内に終わらない」ということでした。また、教科書を点字にする際に、グラフの読みやすさや視覚障害児の理解度に合わせて、細かい修正が行われているということも書かれていました。インクルーシブ教育で、視覚障害のある生徒が使う教科書と、視覚障害のない生徒が使う教科書が同じでなければ、同じ場所で学ぶことには未だ難しさがあり、対応できていない現状があるように感じました。

「盲学校の先生が点字を読めない」という話題が上がっていましたが、今後、視覚障害児が受ける教育の質を保障するためにも、盲学校の専門性（点字が読める先生がいるなど）を高める必要があると感じました。インクルーシブ教育が推進される一方で、「盲学校で学ぶ」という選択肢も残していく必要があるのではないのでしょうか。

特別支援学校は、聴覚の免許を持っているからと言って手話ができるわけではない。手話が出来なくてもやっていけるのか。また、実際学校の中には手話が出来ない新卒の教員はどれくらいいるのかという内容の話が出た。手話ができるに越したことはないが、ろう学校の中でも人工内耳をつけている生徒が多いため、聞こえる生徒もいる。そのため、できないからと言って授業が出来ないわけではない。どのクラスに配属になるかで変わるのではないかと。手話は働きながら覚えるのでも間に合うと思うという意見が出た。

パソコンを活用すると便利で、見える人と情報を共有することもできるが、「視覚障害者の文化として点字を守っていきたい」という言葉にハッとさせられた。パソコンの方が便利だから、メリットが多いからと言って、マジョリティ側が視覚障害者の文化を奪ってはいけないと感じた。視覚障害者と点字、聴覚障害者と手話というように、ここでも視覚障害者と聴覚障害者で共通する部分があるとわかって面白かった。

盲のスーパーダンク

モハメド・オマル・アフディン 先生のセミナー



アブディン先生のプロフィール

【経歴】

CAPEDS 代表理事 Mohamed Omer Abdin モハメド・オマル・アブディン
1978 年、スーダンの首都ハルツーム生まれ。幼少期から徐々に視力を失い、12 歳には文字の読み書きが出来なくなると同時に、スーダンの国民的スポーツであるサッカーを通じた近所の子供達とのコミュニケーションの機会を失う。ハルツーム州の小・中・高等学校を経て、96 年ハルツーム大学法学部に入学。その後 1998 年 1 月 20 日、国際視覚障害者援護協会の招聘を受け来日。同年 4 月から 2001 年 3 月まで福井県立盲学校高等部理療科専攻科にて鍼灸マッサージを専攻。それらの勉強と並行し、2000 年に日本語能力試験 1 級を取得。またこの間に点字と出会い、10 年ぶりに自力で本を読む楽しみを取り戻す。2001 年 3 月に同校を卒業。鍼師・灸師・マッサージ師国家資格を取得。同年 4 月から筑波技術短期大学情報処理学科に入学。ここでコンピューターと画面音声読み上げソフトの使用を習得。他者の力を借りて勉強していたそれまでと異なり、自らの力で情報を集め、発信して他者と共有する手段を得る。またこの時期、失明前の幼少期に慣れ親しんだサッカーの練習を同大学の体育の授業で提案したことから、視覚障害者が参加できる「ブラインドサッカー」との出会いを果たす。2003 年同課程を中途退学、同年 4 月から東京外国語大学外国語学部日本課程日本語専攻に入学。一方で、発明から 180 年経った現在でもスーダン国内で点字が普及せず、大学はおろか初等教育にも参加できない母国の障害者の現状を当事者として危惧し、この時期より母国 スーダンの視覚障害を持つ子どもたちへの点字学習支援を開始。2005 年から視覚障害者サッカー普及活動を母国で開始。2006 年 9 月 4 日付朝日新聞朝刊「天声人語」欄において、これらの障害者支援活動が紹介される。2007 年に同課程を卒業。同年 4 月から同大学大学院地域文化研究科国際協力専修コース平和構築・紛争予防コースに入学。また同年 3 月、任意団体「スーダン障害者教育支援の会」を立ち上げた。2008 年 3 月 4 日、同団体は NPO 法人として認定を受ける。2009 年 3 月に修士課程を終了。同大学の総合国際学研究科の博士後期課程に入学。2013 年 5 月 ポプラ社から「わが盲想」を出版。2014 年 9 月 10 日 博士号取得。2014 年 10 月～2017 年 3 月まで東京外国語大学 世界言語社会教育センターにて特任助教の勤務を経て、2017 年 4 月 1 日に学習院大学にて法学部政治学科の特別客員教授に着任。

【活動】

2008 年現在でも、スーダン国内の視覚障害者は依然として耳学問（他者による音読での勉強）に頼ることを余儀なくされている。しかし耳学問には本の読み手が必要であり、自由に本を読めないことが勉強する上での大きな障壁となっている。そこでこの障壁を克服した当事者の一人として、日本で得た情報や経験を元に、母国の視覚障害者の教育環境整備に力を入れることを強く決意した。草の根の支援から始まったこの活動は、のちに任意団体という形を経て NPO 法人格を取得。当事者としての強い思いを胸に、当人は理事長の役

職へ就任する。初めは筑波大学の学生と共に学園祭でジュースを販売し、得た売り上げ金によって点字板を購入し現地の子どもたちへ送る活動を行った。しかしスーダンの深刻な状況に対して行われる単発的な援助の限界を痛感した結果、持続的な支援を行うために組織を立ち上げる必要性を認識。同じ思いを共有する学生や障害者仲間を中心に任意団体「スーダン障害者教育支援の会」を立ち上げた。この団体は2008年、内閣府の認定を経てNPO法人となる。現在までにハルツームの子供たち約300人へ点字板を贈ったほか、ハルツーム大学の「障害を持つ卒業生の会」と連携し、同大学にスーダン初の障害者情報教育支援センターを立ち上げるべく精力的に活動している。またスポーツとしてだけではなくコミュニケーションツールとしての重要性を持つサッカーにも焦点を当て、障害者スポーツの認知度を上げるためにブラインドサッカー普及活動の一環としてボールの贈呈やワークショップを開催している。主に紛争面に焦点が当てられるスーダンのニュースの中では、社会的に弱い立場に置かれた人々の現状や声を取り上げられることは非常に稀である。日本人・スーダン人・健常者・障害者を交えた個人的な人間関係から発展した草の根国際協力を率いる身として、今後も当事者の声を代弁し、彼らが真に人間的な人生を送る手助けをするために、進んで発信する活動を続けていく。

以上 CAPEDS HP より <http://capeds.org/member/abdin.html>

CAPEDS とは Committee for Assisting and Promoting Education of the Disabled in Sudan
特定非営利活動法人スーダン障害者教育支援の会 <https://capeds.org>



11月17日

モハメド・オマル・アブディン先生のセミナー（11月17日）

1. 現在のお仕事について

参天製薬

日本で最も伝統のある、有名な目薬等の会社で、世界中（アメリカ、カナダ、ヨーロッパ、アジア諸国）に支社・子会社を持つ。

<https://www.santen.co.jp/ja/about/outline/group.jsp>

現在のお仕事は

企画本部 CSR 室で視覚障がい者のインクルージョン等の活動。

注）CSR とは Corporate Social Responsibility。企業が倫理的観点から事業活動を通じて社会貢献をする。

例えば、視覚障がい学生対象のオンラインワークショップを企画するなど大学生のキャリア教育、あるいは小学校での啓蒙活動、ブラインドサッカーのサポート等。

目薬の会社なのでよりよく見えること、見えなくてもよく生きられること等を目指す。

2. スーダンの障害児・者について、特に盲学校の状況は？

全国に寺子屋のようなコーランを教える学校がある。見えない子どもはそこに入って、モスクの先生になることが多い。儀式を執り行ったり、子どもたちを教える仕事に就ける。給料は少ないけれど住むところ、三食が、保証される。

聴こえない人は車の整備の仕事等に就く人が多いようだ。聴覚障害を雇用採用する会社もある。たばこ会社等。元々フォーマルセクターは20%程度で、障害の有る無しに関わらず、その日暮らしで道で物を売るといような人は多い。家業の手伝い等も多い。

3. イスラム教の障害観は？

イスラム教一般と言うより、それぞれの地域の文化による。

コーランに、視覚障害者を邪険にした預言者が神にとがめられたという話がある。預言者が叱られる唯一の例。

障害者や病人は聖戦で闘わなくてもよい、との記述もある。

見えない人に祈ってもらったら、願が叶うというような考え方もある。

障害者を捨てるというようなことはない。

ことばを大事にする社会。文字中心ではないので視覚障害者は日本より有利。文字は読めなくてもかまわない。視覚障害者で学校の先生というのは多い。日本語は文字が書けないと困る。（漢字が必須。）スーダンやエジプトは非識字率が高い。文字より記憶が重要。

学校は給料が低いので、教えるのが上手い人は副業する。

古代から視覚障害者の詩人などもある。

近代国家では、文化人は文字を使う人という傾向。しかし、コーランや詩を覚えたり、リテ

ラシーがなくても知識が多い人もいる。日本は古典等も含め、文字中心の教育。そのことでいろんな表現方法が落ちてしまっているのではないか。文字に偏ると似たような言葉ばかりになる。

視覚障害者が一度きいだけで記憶できる、ということではなく、人による。自分は人間に興味があるのでささいなことでも人についての内容は良く覚える。

4. 日本では政治・福祉のはなしをすると変な人、意識高い系などと扱われることについて意見を交わす、宗教の話をするのは、他の意見を持つ人と話することになる。日本人は得意ではないようだ。学校教育の影響が大きいと思う。皆同じことを言わなければならないとか、宗教の話をしてはいけないというところがある。異なる思想に触れる場がない。人と違うことを言うといけないのではないかと思う。

いかに政治が自分に関わるかを勉強していないのではないか。

スーダンでは政治がどうなるかは自分が死ぬか生きるかの問題。殺されるかもしれない。

だから話さざるを得ない。

日本で、学校の先生が自由に意見を言えないのはかわいそう。30人もの子どもを教えなければならないのも大変。

スーダンでは学校の生徒会などでは、政府に賛成・反対等の議論がある。

大学でも学生運動がある。日本は過去の激しい学園紛争のイメージがまだあって、政治の議論ができないのではないか。

5. 教育・教育

スーダンには福祉制度と呼べるものはない。大家族が助け合う。

一千万人が出稼ぎ。多くの家庭が仕送りに頼っている。湾岸諸国への頭脳流出もある。

例えば一万人の医師がサウジアラビアへ流出。250人の同級生中94人が同じ便でサウジアラビアへ行ったことがある。

スーダンでは医師は食べていけない。スーダンの医師は腕はいい。勘がいい。僻地であらゆる科をやらなければならない。帝王切開などもひとりでやる。無事に生まれたら、医者の名前をつけるくらい。

6. 点字教育は？

盲学校では先生が手打ちで参考書を作ったりする。

2007年教育支援の会を立ち上げた。点字プリンターで点訳作業をすることを支援している。

NPO 法人 CAPEDS=Committee for Assisting and Promoting Education for Disabled in Sudan (スーダン障害者教育支援の会)

ろう者の感想

スーダンでは盲学校が1校しかないことに驚いた。アブディン先生は盲学校ではなく、普通の学校に通っていたという話を聞き、自分と似ている部分があると感じた。アブディン先生が言っていた友達関係は本当に大切である。支援してもらう関係ではなく友達関係で互い助け合うことで対等な関係を作ることができると私も思う。最後に聾学生ともっと話してお互いのことを知って行きたいと言ってくれたことはとても嬉しかった。私ももっとろう学生と一緒に話してみたい。

障害者が物件探しをするとき、障害を理由に物件紹介を断られる。現在は、不動産会社から大家さんに障害の情報等が伝えられるが、**私自身もそのような経験をしたことがあるように、障害があると伝えただけで内覧を断られてしまうケースがよくある。**障害者差別解消法の成立により、不動産仲介業者などが障害を理由に入居や契約の拒否をすることが禁止されたが、まだまだ周知が行き届いていないわけではない。アブディンさんがおっしゃっていたように、「日本の視覚障害者は家を貸してももらえない」という現状である。たださえ、視覚障害があるというだけで断ってくる大家さんが多いことに驚かされた。少し調べてみると、大家さんは「全盲の人は火災を起こしやすいのでは」と心配されているとのことだが、視覚障害者の支援制度では、火を使わない電磁調理器などが給付対象となっている。この制度を知らない大家さんは、障害者が拒まれる理由として「何かあったら困る」という漠然とした不安であることが、大家さんたちの認識が大きな問題である。また、近年では、日本の国際化に伴い外国人が増え、慣れない大家が外国人を入居拒否する傾向が出てきたために、外国人の入居を断られる場合も多くないと思う。

私はろう者で、アブディンさんとは、情報障害があることと、母語が日本語ではないという共通点があります。私は今でも日本語はとても苦手で、自分の思いを日本語にして伝えることには限界があります。苦しみを伴います。また、見えない状態がどのようなものなのか、目隠しをして体験したことがあります。その時視覚からの情報がなくなったことで、自分がどこにいるのか、どう動けばよいのか分からず、身動きが取れなくなったことを覚えています。そのため、視覚情報がないだけでなく、コミュニケーションの手段となる日本語の習得が十分できていない状態での来日は、大変なことの連続だったのではないかと思います。スーダンでは障害者のための福祉はないということからも、日本の方が進んでいるように思えますが、空港や物件を借りる時のような差別は日常にありふれています。私も今までどれだけの差別を受けてきたか、数え切れません。私は、自分のタイミングで、自分に合った方法で情報にアクセスできることはとても大切なことだと思います。視覚や聴覚に障害のある人たちへの情報保障はまだまだであり、平等ではありません。障害名で一括りにされ、個々に合った方法で情報を得るということについても、保障されているとは言えません。全

ての視覚障害者が点字を読めるわけでも、すべての聴覚障害者が手話を使うわけでもありませんし、ろう者の使う手話は言語として確立したものであり、世間一般に知られている手話とは異なります。これらのことは、情報を簡単に入手出来る人たちにはなかなか気づかれない問題だと思っています。

OCR・点字ディスプレイなどの機器、様々なアプリは生活を豊かにするものだと思います。全国には点字図書館・サピエ図書館もあり、以前と比べて自ら本を選び読む（聞く）という環境は整えられてきています。しかし、まだまだ十分ではありません。学校の勉強については、私も内容が何も分からないまま授業を受けてきました。アブディンさんがおっしゃるように、友だち含め人々の手を借り、フォローしてもらわないとやっていけません、その環境がまだ整っているとさえ言えません。アブディンさんの日本語習得の陰には、ものすごい努力があったことがわかります。日本で色んな活動をされていますが、それが簡単なことではないことは想像できますし、本当にすごいなと思いました。アブディンさんのように生きていきたいと思いました。少しでも社会を変えられるように活動していきたいと思っています。機会があれば、アブディンさんとお話したいと思いました。本日は良い機会をいただき、ありがとうございました。色々準備などをしてくださった齋藤先生、通訳さん、関係者の皆様、ありがとうございました。

まず、全盲でのロールモデルに関する内容について印象に残ったことを書く。盲人の子どもに点字や音での情報などの基礎教育支援を提供することが大事になると学んだ。そこで、子どもだけに注目するのではなく親にも注目することが求められ、将来の可能性というロールモデルをみせることが大事になると改めて理解した。

次に、翻訳に関する内容について印象に残ったことを書く。日本語での翻訳は約 90% できるが、アラビア語での翻訳ではほとんどできないという事実により、健常者と比べて学ぶ機会が少ないことが改めて実感した。この事実に対して、健常者と同じ立場で学べる環境を作り出すことが重要になるであろうと考えた。そのためには、あらゆる手段を使って社会に“盲”という存在を知らせることが大事になるであろうと考察した。

最後に、盲人に関する映画や本、メディアなどについて考えたことを書く。日本でのろう者に関するメディアは違和感が凄いという事実があるが、“エタナールズ (ETERNALS)” という海外映画では当たり前のようにろう者がアメリカ手話で会話していたという事実がある。つまり、海外は日本と比べて理解が進んでいることがわかるであろう。そこで、今回の講義で情報に関する支援は日本が強いということを学んだ。盲人に関するメディアはどのように表しているかを以前よりも意識してみたいと考える機会となった。この講義により、これからの社会は“当たり前”という環境を作っていくことが大事になるであろうと考察した。

呼称に関する質問です。呼称は目のみえない人や盲人、全盲などがありますが、本人にと

ってはどのような呼称が良いと思うかを知りたいです。私の場合は聴覚に障がいをもつ立場で様々な呼称（聴覚障がい者、難聴者、ろう者、ろうあ者、耳の聞こえない人など）があります。その中でろう者という呼称が一番良いと思っています。

貴重な話ありがとうございました。

支援者の感想

何か自分のすべきことを見つけられるというのは大切だなと思う。自分だけが情報保証を受けることができ、自分の道を決められるということで終わるのではないのはすごいと思った。自分だけでなく、祖国の暮らしを少しでも変えようとするのは素晴らしい。その行為がすごいだけでなく、その行為を義務だと思っていることが尊敬に値するなと感じた。私自身も何か義務と思えることを見つけて積極的に活動できるようになりたいと思った。

「家族というセーフティネット」その表現は日本からは薄れつつあるのかなと思った。家族から虐待をうけることは例外とする。自分が成人した後も、困ったときに親を頼る、もしくは子を頼るということが敬遠されるようになってきている。助けを求めにくい社会というのが家族内にも出てきたのではないか。今回のアブディンさんの話を聞いて日本の家族の在り方を考えさせられた。

今回質問できなかったのですがスーダンには点字ブロックはあるのでしょうか。日本の点字ブロックと違いはありますか。点字ブロックが使いにくいなと思うことはありますか。

アブディンさん、本日はお忙しい中ありがとうございました。アブディンさんが行なっている点字の講習会で、親もいっしょに参加しロールモデルを見せることで家族全体をポジティブな気持ちにさせる取り組みはとても興味深かったです。点字を学んで生き生きしている子どもの姿を見て、親も我が子の色々な可能性に気づくのだと思いました。アブディンさんのお母様が、見えないからこそ勉強ということを伝えていたように、子どもの成長には親の協力や意識付けも大切だと感じました。

また機会がありましたらお話を聞かせて頂きたいです。本日はありがとうございました。

私は、アブディンさんの話を聞いて、スーダンの学びの場が現在も全く整ってなくて、いまだに大変な状況が続いていることが分かりました。スーダンで生きていく中で、サッカーがとても人気で、サッカーが出来ないとうまく馴染めないことに驚きました。支援の4つの柱の基礎教育支援や情報教育支援は、その他のたくさんの支援にも関わってきますが、ブラインドサッカーなどの障害スポーツの普及はスーダンならではだと感じました。スーダンでは、各地で続く紛争や暴力により、定期的な予防接種を含む医療へのアクセスが妨げられ、感染症のリスクが上昇していて、難民キャンプや紛争地域では、1日に3人～5人の子どもたちがマラリアなどの予防可能な病気で命を落としている中で、福祉の体制・生活状況は好転していません。この状況を変えていくためには、他国のサポートが重要になってくる

と考えました。

今回のお話の中で印象的だった部分はアブディンさんが質問に答える際に「障害者だけではなくスーダンではこんなことがある」「障害者だからと言って困っているわけではなくみんなも、誰でも～」という言葉をつけていたことです。目が見える私は目が見えない人は困っていることが自分とは違う、自分よりも多くの生きづらさを抱えていると反射的に思ってしまうのですが、そうではないということに気づかされたのです。スーダンという国では日本と異なることも沢山あるし、日本ほど様々な整備がないのは盲人も障害がある人もない人にも感じる事が一緒だということです。ごく当たり前のことなのですが私たちは少しの違いを持つだけなのだと思えて気が付くことができました。

そんなアブディンさんだったからこそ、ご両親の伝えてくれる教育の大切さを受け止め理解し努力を重ねることができたのだと思います。教育を基盤に点字を教え、盲人のロールモデルを示し、様々な生き方ができることを伝える活動という視点があるのだと思います。そして「日本に来たのは、自分の為だけではなく誰かを助けることができるようになるためだ」という言葉がとても胸に響きました。

自分自身まだまだ、障害への理解や海外の多様な考え方の理解ができていない部分が多く、自分が思いもよらない部分で「今の言い方は差別的だった」とか「こういう考え方は良くなかった」など沢山の失敗をしますが、知ろうとすることを決してやめてはいけないと強く感じる事ができました。

スーダンの盲学校は1校であった。スーダンでは障害が本当に大きなハンデになっていると想像できた。そのような状況で、私なら色々なことを諦めてしまいそうだから、純粋にアブディンさんはすごいなと思った。

スーダンでは障害者の福祉制度などが整っていないし、失業率は50%を超え、大家族がセーフティネットになっているという話があった。家族人員を増やすことは生きていくために必要なことになっているのだとわかった。そのような国で、子どもを産めない女性はどのような扱いを受けているのか気になった。もしかすると、生きていくためにそれが当たり前の事になっていて、産みたいか産みたくないかということは考えていない人が多いかもしれないが、若い時から出産を繰り返さざるを得ない状況であることは問題であると感じた。

また、盲ろうの人に関しては、家から出されていないのか、実態があまり掴めないという話が印象的だった。一人も取り残されない社会の構築のため、国内でも国外でも権利擁護のための取組を増やしていかなければならない。他国の実態を知るとともに、日本もまだまだ課題はあると感じた。

アブディン先生からの講義より、視覚障害者への支援がスーダンだけでなく、日本にも課

題があることに気づいた。アブディン先生の講義の中で印象的なところは、スーダンには盲学校が一つしかないこと、障害者への支援は国からも特になくという部分です。今まで国から障害者への生活の支援は当たり前だと思っていた部分があり、改めて世界のことを知らなすぎるといふ部分で国際福祉への関心が生まれた。特にスーダンでは文化的にも（従兄弟同士の結婚など）から障害を持って生まれる人が多いという現状があるとアブディン先生の著書より学んだ。障害を持って生まれる子どもが多いという部分に焦点を置き、国はそこに対する支援をもっとするべきであると考えた。しかし、現在も内戦などにより、生きることも簡単ではない国で果たして社会福祉はどこまで可能なのか、国として役割を果たすことの困難な状況である現在に私たちはどのように働きかけることができるのか、さらに学びを深めたいと思った。

アブディン先生の著書は、読み進めるうちに自分がアブディン先生の人生に関わってきたような不思議な感覚に陥るほど面白みがあり、なおかつ途中で視覚に障害があることを忘れてしまうような興味深い話で楽しめました。

アブディン先生のお話で印象に残ったのは、スーダンの視覚障害者への支援について点字教育だけでなく情報教育も行なっていることだった。点字教育は視覚障害を持った人にとって情報を得るために必要なことであると想像しやすいが、点字に直すために情報教育・パソコンの教育を行うというのは盲点だった。当事者でなければ、断片だけの支援となり必要な支援・教育につなげることができなかつたのではないかと考えた。中東は文字の文化ではないというお話も印象に残っている。口頭で伝承されていく文化は興味深かった。音での伝承で思い浮かべたのは琵琶法師だったが、それも視覚障害に関係があると思うので文字文化や口頭での伝承文化について調べてみたいと思った。

スーダンで法学を学んでいたアブディンさんが23年前（私たちが生まれる前）に国際障害者の招へいする団体の取組で日本にきてから、視覚の勉強・鍼灸の勉強・パソコン（情報）の勉強を様々な学習機関で学び、今の仕事をしていると知った。日本からスーダンの盲人への支援をするのは、これらの経験を行ってきた自分の義務であるという言葉が今の自分にはとても印象的だった。私もやりたいことや将来の仕事に就くまでに様々な経験をしたい、そして好きなことが自分の使命ややりがいにつながってほしいと思う。23歳からたくさん学んで紆余曲折することの大切さを学んだ。

スーダンの現状は1万人以上いる盲者の中で50人近くが大学で学んでいるという。福祉制度は日本より整っていないようだが、アプリの推奨、基礎教育・情報教育・ブラインドサッカーなど文化の教育など彼らにとってどのように学習するのがふさわしいかを段階的に考えられていると思った。卒業先が弁護士や教員、プログラマーなど様々で、日本同様制度的な障壁を早急に改善させる必要があるのかなと思った。アラビア語の点字がどのような形なのかも気になった。

日本にも国際的な障害者を支援する団体があると初めて知った。言葉や文化・現地の国際情勢も全く違う中でスーダンの現状を知ることが楽しかった。この度はお話しいただきありがとうございました。

アブディン先生のNPOについての話の中で印象的だったのは、視覚障害者の平等な社会参加のための4つの柱についてである。①点字による基礎教育支援、②パソコンなどによる情報教育支援、③ブラインドサッカーなどによるスポーツ普及、④内発的取り組み、という四つの柱を中心に活動しているという話だった。これらの活動のなかで、視覚障害の子どもを持つ親などもやりとりを行い、視覚に障害があっても教師として活躍できるというようなロールモデルを見せることが大事であるという話は、日本でも積極的に取り入れるべきだと感じた。

障害者だからといって、いつもサポートされる側にまわるのではなく、相手のできないこと・足りない部分を補い合うことで、対等な友人関係を構築していったという話も興味深かった。聴覚障害者との関係については、自分の障害（視覚障害）だけに埋没してしまい、他の障害について考えられないというのではなく、共生して、互いのニーズを把握し助け合うことを通じて、お互いの理解を深めていくことが重要である、という話にもつながると感じた。

また中東地域は元々文字文化ではなく、「聴いて喋る文化」であるので、コーランなども暗記している人が多いという話や、お風呂などで自分の裸を他人に見せるのはあまり好まれないことなど、日本との文化の違いについての話も興味深く、勉強になった。

差別の原因がディスコミュニケーションであるという話が印象に残った。自分が書いた卒論の中で、差別の原因は知識がないことであると考察した。この二つから、相手とコミュニケーションを取ることで相手を知ることが出来れば、差別はなくなるだろうと考えた。そして、これは授業後半の日本のボランティア学生が現地の人々と親しくなることで支援の意識が変わった話とも繋がるのではないかと思った。現地の人とコミュニケーションを取り現地の人を知ることによって「他人事」から「自分事」のような意識変化が起こったのではないかと考えた。

今日は、貴重な貴重なお時間をいただきましたありがとうございます。スーダンでは、福祉が充実していないことが分かった。また、障害者に対する見方などはイスラム教によって変わるのではなく、その地域の伝統や風習など地域ごとに違いがあると分かった。イスラム教の信者だからというふうに断定はできない。また、サッカーが人気なことを初めて知った。ブラインドサッカーをスーダンで広めたいというアブディン先生の考え、また教育現場の改善など自国で自分にできることは何か考え行動する姿にとっても心打たれた。いつかスーダンに行ってみたい。

盲学校に入れない子ども達の点字教育についてなど、実際にどのような活動を行っているのか聞いて勉強になった。また、障害者は下に見られてしまうことも多いが、アブディン先生は、友人と対等な関係で、お互いに足りない部分を補い合っていたというお話を聞いて、理想的な関係性だと思った。障害者でも常に支援を受ける側ではなくて、誰かの役に立てるということは自信にもつながると感じた。また、障害者が取り上げられているドラマの話で、その当事者自身が制作したり、役を演じたりすると納得するが、当事者ではない人が制作したり、役を演じたりすると矛盾が生じてしまうというお話を聞いて、当事者側から発信していくことの重要性を感じた。当事者だからこそ伝えられることがたくさんあると思った。また、「自分自身が幸せになればそれで終わりではない」「自分の障害ばかりに埋没しないで他の障害も理解する、お互いに助け合う」という言葉が印象的で、自分自身と向き合うことも大切だが、自分以外にも目を向けるという視点も必要だと感じた。石焼き芋の歌の話は、ずっと日本に住んでいるとなかなか気づけないことなのでとても面白かった。